

# 特定非営利活動法人 サロン 2002 とは



## <2017年1月月例会報告>

\*\*\*\*\*

# NPO サロンの事業を考える① —公開シンポジウム—

中塚 義実 (NPO 法人サロン 2002 理事長/筑波大学附属高等学校)

\*\*\*\*\*

【日 時】 2017年1月24日(火) 19:15~21:10 (終了後は「景宜軒」~23:30頃)

【会 場】 筑波大学附属高校 3F 会議室 (東京都文京区大塚 1-9-1)

【テーマ】 NPO サロンの事業を考える①—公開シンポジウム

【演 者】 中塚義実 (NPO 法人サロン 2002 理事長/筑波大学附属高校) ほか

【参加者 (会員・メンバー) 11名】

安藤裕一 (GMSS ヒューマンラボ)、春日大樹 (筑波大学大学院)、岸卓巨 (日本スポーツ振興センター)、小池正通 ((株)La Esperanza)、小山基彰 (ヒーローインタビュー)、笹原勉 (日揮(株))、関谷綾子 (関谷法律事務所)、茅野英一 (帝京大学)、中塚義実 (筑波大学附属高校)、守屋俊秀 (世田谷区サッカー協会)、守屋佐栄 (2017はUAE、イラン、サウジに行く予定)

【参加者 (未会員) 0名】

【報告書作成者】 中塚義実

## 目 次

### 1. サロン 2002 と公開シンポジウム

- 1) コンフェデレーションズカップ総括シンポジウム (2001)
- 2) ワールドカップ総括シンポジウム (2002)
- 3) 2003年度からの「公開シンポジウム」

### 2. 公開シンポジウム 2016 「日本サッカーのルーツを語ろう！」

- 1) 準備段階
- 2) シンポジウム概要
- 3) シンポジウムの運営
- 4) 報告書について

### 3. これからの「公開シンポジウム」

## はじめに

1997年4月より「サロン2002」を名乗るようになって今年で20年。節目の年にあたり、月例会でもNPOサロンの事業を振り返り、今後について意見交換する場を設けたいと思います。

今回はその第一弾。「公開シンポジウム」を取り上げます。



## 1. サロン 2002 と公開シンポジウム

サロン 2002 にとって最初の公開シンポジウムは、2001 年度の「コンフェデレーションズカップ総括シンポジウム」であった。2016 年末の「日本サッカーのルーツを語ろう」まで、そのときどきのテーマ設定と内容は次の表にあるとおりである。

ところどころ「出張サロン」も絡めて開催していることがわかる。

サロン2002公開シンポジウム一覧(2001～2016)			
年度	期日	会場	テーマ(演者)
			2017.1.24.
2001	2001.7.22.	横浜国際総合競技場	コンフェデレーションズカップ総括シンポジウム 長岡茂、竹原典子、小島裕範
2002	2002.8.3.	東京体育館	ワールドカップ総括シンポジウムⅠ-「ささえる物語」を中心に 長岡茂、村林裕、宮城島清也
	2002.8.10.	神戸ファッション美術館	ワールドカップ総括シンポジウムⅡ-「観戦と交流の物語」を中心に 賀川浩、スー木下、橋本潤子、宇都宮徹彦
2003	2003.8.2.	東京体育館	2003公開シンポジウム「地域で育てるこれからのスポーツ環境」 中塚義実、宇都宮徹彦、山下則之
2004	2004.11.27.	立教大学	2004公開シンポジウム「totoを活かそう！-地域スポーツ振興のために」 福西達男、高橋正紀、徳田仁、両角晶仁
2005	2005.11.12.	味の素スタジアム	2005公開シンポジウム「クラマーさんありがとう！」 D.クラマー、賀川浩、両角晶仁、大橋二郎、中塚義実
2006	2007.3.24.	日産スタジアム内	2006公開シンポジウム「2006年 ドイツで感じたこと」 池田誠剛、庄司悟、徳田仁
2007	2007.12.15.	青学会館7階ホール	2007公開シンポジウム「サッカー観戦を楽しもう！-スタジアム編」 仲澤真、徳田仁、宮明透
2008	2009.1.31.	日本青年館・会議室	2008公開シンポジウム「地域からみたJリーグ百年構想」 宇都宮徹彦、宮明透、守屋実
	2009.3.21.	那智勝浦町体育文化会館	日本サッカー史シンポジウム「中村覚之助と日本サッカーの夜明け」 牛木素吉郎、森岡理右、山本殖生、中塚義実
2009	2010.2.6.	オリンピック記念青少年総合センター	東京シンポジウム「日本サッカーの始祖 熊野の中村覚之助」 中村統太郎、真田久、加藤弘、中塚義実
	2010.3.6.	青学会館7階ホール	2009公開シンポジウム「2019ラグビー・ワールドカップ日本大会を語ろう！」 岩淵健輔、直江光信、島田佳代子
2010	2011.3.5.	堺市立ナショナルトレセン	2010公開シンポジウム=デンソーシンポジウム「育成期のサッカーを語ろう！」 上田亮三郎、松田保、黒田和生、関塚隆
2011	2012.3.4.	味の素スタジアム	2011公開シンポジウム『「高校サッカー90年史」を語ろう！」 北原由、牛木素吉郎、賀川浩、中塚義実
2012	2013.3.23.	臼杵市民会館小ホール	サロンin臼杵「竹腰重丸を語る」 浅見俊雄、牛木素吉郎、吉田稔、中塚義実
	2013.3.30.	テバ・オーシャンアリーナ	2012公開シンポジウム「U-18フットサル」を語ろう！ 松崎康弘、大立目佳久、岩本芳久、中塚義実
2013	2014.3.30.	筑波大学東京キャンパス	2013公開シンポジウム「スポーツクラブの法人化を語ろう！」 賀川浩、黒崎祐一、水上博司、中塚義実
2015	2015.7.4.	筑波大学東京キャンパス	2015公開シンポジウム「スポーツで“ゆたかなくらし”を！」 村松邦子、山口拓、小林洋平、岸卓巨
2016	2016.12.17.	桐蔭会館	2016公開シンポジウム「日本サッカーのルーツを語ろう！」 -東京高等師範学校の足跡を中心に- 真田久、賀川浩、牛木素吉郎、中塚義実
注1) 「日本サッカー史シンポジウム」は、筑波大学蹴球部同窓会茗友サッカークラブと日本サッカー史研究会が主催し、サロン2002が協力。「東京シンポジウム」は、熊野三山協議会主催、サロン2002は共催した。			
注2) 「デンソーシンポジウム(2010公開シンポジウム)」は、株式会社デンソーの特別協賛のもと、(財)日本サッカー協会、全日本大学サッカー連盟、デンソーカップ実行委員会とサロン2002が主催した。			
注3) 「竹腰重丸を語る」は、サロン2002が主催する「サロンin臼杵」として開催。臼杵市、臼杵市体育協会、臼杵市教育委員会、日本サッカー史研究会、一般社団法人東大LBC会、ピバサッカー研究会、臼杵市サッカー協会、社団法人大分県サッカー協会の後援、また地元の多くの企業の協賛を得て開催した。			

## 1) コンフェデレーションズカップ総括シンポジウム (2001)

「スポーツを通しのゆたかなくらしづくり」を“志”に掲げるサロン2002にとって、「2002年FIFAワールドカップ」は、大変大きなイベントとして認識していた。2002年以降にどうつなげるかがより重要であるという立場ではあったが、この世界的イベントをホスト国としてどう受け入れ、盛り上げるか、当事者として自分たちにできることは何かを考える場として、「ワールドカッププロジェクト1」を立ち上げた。

当時から、「月例会は、何らかの結論や方向性を示す場ではない。あくまでも自由な意見交換の場である」というのが前提であり、「何らかの結論を出して行動に移したい場合は、プロジェクトチームをつくり、行動につなげる」ことにしていた。

サロン2002の最初のプロジェクトは「フットサルプロジェクト」であり、ワールドカッププロジェクトはそれに続くものであった。

プロジェクト1の結論として出てきたのが公開型のシンポジウム開催である。2001年に国内3カ所で開催されたコンフェデレーションズカップを取り上げ、各地で様々な形で関わる演者にご登壇いただいた。シンポジウムは、人と情報が行きかう場であり、終了後の懇親会を含め、“同志”が出会うことで相乗効果が生まれることを期待した。実際にこのシンポジウムでつながった人たちが、2002年とその先にさまざまな成果をもたらした。

シンポジウムの内容は後日報告書にまとめ、より多くの方に伝えることを目標とした。報告書には「寄稿編」を設け、さらにJAWOCで大会運営に深く関わる鈴木徳昭氏へのインタビューを試み「インタビュー編」として掲載した。このインタビューは、活字になった部分だけでも面白いが、活字でできなかった話も含め、大変興味深いものであった。このときの報告書は600部作成し、JFAやJAWOC、

### 別紙2：ワールドカップ・プロジェクト1立ち上げ宣言

2001.5.8.

#### ワールドカップ・プロジェクト1(ワン)

#### ーコンフェデ杯から何かを残そうプロジェクト(仮称)の提案

##### <発起人>

笹原勉(日揮/横浜市市民)  
竹原典子(浦和レッズスチュワード/Jリーグボランティアネットワーク発起人)  
中塚義実(筑波大学附属高校/サロン2002代表)

サロン2002の"志"にあるように、私たちは「"志"を実現する上で、2002年FIFAワールドカップ韓国/日本大会は大きな節目であると認識」しています。個々の会員は、それぞれの持ち場で様々な活動を展開していますが、これまでのところ、組織としてのサロン2002は、具体的な活動に取り組みません。この5～6月に、ワールドカップのプレ大会としてのコンフェデレーションズカップが開催されます。サロンの会員にも関係者が何人かいます。この大会をきちんと総括し、本番に経験を生かすことは、組織としてのサロン2002が取り組むべき活動と考え、ここに「プレ大会から何かを残そうプロジェクト(仮称)」の立ち上げを提案致します。

この5～6月に、ワールドカップのプレ大会としてのコンフェデレーションズカップが開催されます。サロンの会員にも関係者が何人かいます。この大会をきちんと総括し、本番に経験を生かすことは、組織としてのサロン2002が取り組むべき活動と考え、ここに「プレ大会から何かを残そうプロジェクト(仮称)」の立ち上げを提案致します。

##### <プロジェクト立ち上げの動機>

FIFA主催の公式戦は、ワールドカップまでにはコンフェデレーションズカップの他にはありません。その貴重な経験を積めるのは、鹿嶋、新潟、横浜の3会場に限られており、しかも各会場における成果と課題がどの程度総括、記録され、全国に公開されるのか未知数であるのが現状です。プレ大会で得られた知見を整理し、共有することが不可欠であると感じます。

##### <本プロジェクトの目的と具体的課題>

動機にあるように、ワールドカップのプレ大会であるコンフェデレーションズカップで得られた知見を整理、共有し、国内におけるワールドカップ準備を再構築する判断材料を得、全国的な気運を盛り上げることが目的です。具体的には以下の2つの課題に取り組みます。

1. コンフェデレーションズカップ開催地における準備等諸活動の検討、反省、総括  
そのために、「コンフェデレーションズカップ総括シンポジウム」を7月末(7月22日が第一候補)に開催する。鹿嶋、新潟、横浜の事例をもとに検討
2. 試合開催地が得た情報・経験を全国各地へ発信  
そのために、上記1を含めた「コンフェデレーションズカップ総括報告書」を作成し、ワールドカップ開催自治体、JAWOC、FA、ボランティア組織、市民活動組織等に配布する  
また、シンポジウムの様子や報告書の内容は、各メディアを通して積極的に配信する

##### <活動期間> 2001年5月～8月

##### <プロジェクトの発展性>

「ワールドカッププロジェクト」には今後も継続して、様々な角度から取り組んでいきたい。それは、「この世界的イベントの"成功"に貢献するとともに、同大会後の"ゆたかなくらしづくり"のためにできることを考え、行動する」という「サロン2002の"志"」に沿った活動でもある。

今回得たノウハウや人脈を、各開催地で行われるワールドカップ関連イベントやワールドカップ本番に生かしたり、Jリーグのボランティア組織等や市民団体等の、サッカー・スポーツをささげる組織に蓄積することで、ワールドカップ以降の“ゆたかなくらしづくり”に貢献し得る。

以上



47 都道府県サッカー協会や開催自治体、公認キャンプ候補自治体など、関係する諸機関に無料で配布し、活用してもらおうとした。

かなり大規模なシンポジウムと報告書作成・配布事業であったが、全体を通して「黒字」であった。シンポジウムの運営は参加者からの参加費で、報告書は個人や団体からの賛助金で作成するという、各事業独立採算の方針はこのときからいまに至るまで変わらない。FIFA ワールドカップへ向けての機運があったからか、多くの参加者と賛助金を集めることができた。

<b>ワールドカップ・プロジェクト1:会計報告</b>			
<b>&lt;シンポジウム関係&gt;</b>			2001.7.23.
<b>収入の部</b>		<b>支出の部</b>	
科目	金額	科目	金額
参加費(@1000×85)	85,000	会場使用料	23,100
		講師謝礼・交通費	57,100
収入合計	85,000	支出合計	80,200
残金 4,800円は報告書会計に組み入れ			
<b>&lt;報告書関係&gt;</b>			2002.4.8.
<b>収入の部</b>		<b>支出の部</b>	
科目	金額	科目	金額
シンポジウム残金	4,800	報告書印刷費(800冊)	236,000
賛助金(団体)	160,000	角二封筒(300枚)	6,000
50,000×1(とさ千里)+30,000×3(Alliance2002、FC 東京、DUOリーグ)+20,000×1(三ヶ日整形外科)		発送手数料	10,000
賛助金(個人)	66,000	消費税(5%)	12,600
10,000×5(浅野智嗣、安藤裕一、北岡真幸、久保田淳、 小緑典子)+6,000×1(坂下佳宏)+5,000×1(井上裕 康)+5,000(堀美和子)			
報告書売り上げ(11月7日入金)	19,500	宅急便・郵便局送料	63,720
報告書売り上げ(2月13日入金)	12,500		
報告書売り上げ(2月20日入金)	11,500		
報告書売り上げ(4月8日入金)	6,500		
利息	19		
プロジェクト補助(全体会計より)	50,000		
収入合計	330,819	計	328,320
残金2,499円は、ワールドカップ・プロジェクトⅡへ繰越し			



関係各位

## コンフェデレーションズカップ総括シンポジウム開催について

サッカー・スポーツを通して21世紀の“ゆたかなくらしづくり”を目指すことを“志”とする異業種ネットワーク「サロン 2002」では、このたび、コンフェデレーションズカップの成果と課題を2002年 FIFA ワールドカップ大会™へとつなげるために、「サロン 2002 ワールドカッププロジェクト 1」を立ち上げ、その一環として「コンフェデレーションズカップ総括シンポジウム」を開催することとなりました。

FIFA 主催の公式戦であるコンフェデレーションズカップを開催地として経験できるのは、鹿嶋、新潟、横浜の3会場に限られます。各会場では、運営側、ボランティア側、あるいは市民の側から、様々な成果や課題が提示されることでしょう。ここで得られた知見を総括し、他地域と共有することによってはじめて、同大会の成果が、2002年につながるものと考えます。シンポジウムを開催して報告書を作成し、関係自治体、JAWOC、FAはじめ、ワールドカップをささえる様々な団体にご活用いただくと考えたのはこのような主旨からであり、それが、2002年の成功、及び2002年以降のゆたかなくらしづくりに貢献するものと考えます。

このような主旨で開催される標記シンポジウムに是非多くの方にご参集いただきますようよろしくお願い申し上げます。なお、主催団体である「サロン 2002」及び「サロン 2002 ワールドカッププロジェクト 1」については、別紙をご参照ください。

### 記

開催日時 2001(平成13)年7月22日(日) 13:00~16:30(12:30受付開始)  
会場 横浜市スポーツ医・科学センター大研修室  
〒222-0036 港北区小机町3302-5 横浜国際総合競技場内地下  
J R 横浜線・市営地下鉄線 新横浜駅下車徒歩15分、J R 横浜線 小机駅下車徒歩10分  
(駐車場が限られているので、車での来場はご遠慮ください)

#### 内容及び演者

運営側からみたコンフェデレーションズカップの成果と課題	長岡茂(JAWOC茨城支部)
ボランティアからみたコンフェデレーションズカップの成果と課題	竹原典子(横浜会場ボランティア参加者)
市民団体からみたコンフェデレーションズカップの成果と課題	小島裕範(Alliance2002(新潟)代表)
司会進行	中塚義実(サロン2002代表)
主催	サロン2002
後援	Alliance2002 NPO法人日本サポーター協会
運営	サロン2002ワールドカッププロジェクト1
参加申込	下記事務局まで、氏名・所属(差し支えなければ)・連絡先(TEL/FAX/Email)を明記の上、EmailまたはFAXでお申し込みください。
参加費	1000円。当日、会場で徴収させていただきます
運営事務局	笹原勉 FAX : 045-754-3710 Email : thsasa@yhb.att.ne.jp

#### 注)「賛助金」のお願い

報告書は、主旨に賛同してくださる個人または団体からの「賛助金」で作成いたします。「賛助金」は一口5,000円とし、拠出していただいた方のお名前を報告書に掲載させていただくことで、賛助の気持ちに応えたいと思います。

さらに、4口(2万円)以上の「賛助金」をいただいた個人や団体には、報告書への広告掲載も可能とさせていただきます。大きさの目安は以下の通りです。

- A 4版1ページ(表紙裏、裏表紙裏)… 5万円以上
- A 4版1ページ(その他のページ) … 5万円
- A 4版1 / 2ページ 3万円
- A 4版1 / 3ページ 2万円

「賛助金」をお出しいただける個人または団体は、事務局へご連絡いただいた上で、下記口座へお振込みください。よろしくお願い申し上げます。

富士銀行板橋支店 2 0 7 6 2 0 7 サロン2002プロジェクト代表中塚義実



報告書送付先(贈呈分)一覧							2001.9.27.
文書№	送付先グループ	件数	冊数	計	小計	配布方法	備考
1	JAWOC本部	1	20	20		9月18日に持参	17部署あり
1	JAWOC支部	10	3	30		三栄社から郵送	
1	開催自治体	10	2	20		三栄社から郵送	
2	日本サッカー協会役員・理事	34	1	34		三栄社から郵送	
2	日本サッカー協会事務局	1	5	5		三栄社から郵送	
3	都道府県サッカー協会	47	2	94		三栄社から郵送	『フットサル連盟は必要か』同封
4	日本プロサッカーリーグ	1	5	5		三栄社から郵送	
4	Jクラブ	28	2	56		磐田・鹿島・神戸は手渡し。その他は三栄社から郵送	ベガルタ仙台、セレッソ大阪は2件(OSC含む)
5	Jボランティア	30	2	60			
					324		
6	公認キャンプ候補地	80	2	160		三栄社から郵送	84立候補から4自治体は辞退
					160		
7	演者・事務局	5	2	10		「関係各位への配布」参照	長岡、竹原、小島、中塚、笹原
7	賛助者(個人)	8	2	16			浅野、安藤、井上、北岡、久保田、小緑、坂下、堀
7	賛助者(団体)	5	3	15+2			とさ千里、FC東京、DUOリーグ、Alliance2002、三日月整形外科(5冊)
7	後援団体	3	2	6			Alliance2002、JSA、ソシオ・フリエスタ
7	寄稿者	8	2	16			小島、浅野、数、片岡、村坂、湯浅、宇都宮、ボランティア編集部
7	インタビュー協力	4	1	4			鈴木(崇)、鈴木(徳)、江川、野上
7	スタッフ	10	1	10			梅本、鈴木(崇)、数、小出、五香、麻生、宮崎、山田、鶴野、岡橋、
					79		
					563		
	(J青年会議所)	28	0	0			
	(J商工会議所)	28	0	0			
8	通信	2	1	2			共同、時事
8	新聞	10	1	10			朝日、毎日、読売、産経、日経、サンスポ、スポニチ、デイリー、日刊スポ、報知
8	テレビ	8	1	8			TBS、テレビ朝日、テレビ東京、日本衛星放送、日本テレビ放送網、日本放送協会、フジテレビジョン、スカイパーフェクトTV
8	雑誌(サッカー専門誌)	4	1	4			JFANews、サッカーマガジン、サッカーダイジェスト、ストライカー
8	インターネット	3	1	3			サッカークリック、FCJAPAN、スポナビ、
8	ジャーナリスト	6	1	6			大住良之、後藤健生、牛木素吉郎、賀川浩、セルジオ越後、玉木、
9	研究者	1	1	1			佐伯聰夫、
10	資料として寄贈	2	1	2			国会図書館、体協資料室
					36		
					599		

## 2) ワールドカップ総括シンポジウム (2002)

FIFA ワールドカップが6月30日に終了。総括シンポジウムを8月初旬に東京と神戸で開催した。

東京では「ささえる物語」物語を、神戸では「観戦と交流の物語」を取り上げ、それぞれの分野でご活躍された方々が登壇した。報告書の寄稿編には、ルーマニアのキャンプを誘致しようとしていた岐阜県飛騨古川町（現飛騨市）からも原稿をいただき、貴重な活動の記録となった。

## 3) 2003年度からの「公開シンポジウム」

2002年FIFAワールドカップ後は、年1度のシンポジウムはそのときどきのトピックを追いながら、「スポーツを通してのゆたかな暮らし」を考える場となっていく。

2003年度は高校生年代のユースサッカーリーグ（DUOリーグ）など、地域におけるスポーツ振興の取り組みを紹介し、2004年度は地域スポーツの財政面での裏付けとしてのtotoの動きを取り上げた。内容的には充実していたが、告知や営業面で行き届かず、参加者数は通常の月例会とあまり変わらず20～30人程度であったのが惜しい。

2005年度はJFAの招待でデットマール・クラマー氏が来日されるタイミングで、「クラマーさんありがとう！」と題するシンポジウムを実施した。進行役の中塚は数日前に「ぎっくり腰」を患い、杖をついての登壇である。80歳を越えるクラマー氏に「君は病院へ行った方がよい」と慰められたのが、日本サッカーの父との初対面の思い出である。

2006年はドイツ大会の振り返り。発表者のプレゼン時間が大幅に伸びたことが思い出される。

2007年度の「サッカー観戦を楽しもう」では、シンポジウムの内容を、一般参加者が個人のブログで報告する事件が発生し、嚴重注意と削除・謝罪を求めた。SNSの普及とともに、情報管理の面で新たな時代に入ったことが感じられた。公開シンポジウムの内容は、サロン2002が責任を持って公開する。そのための速やかな報告書作成が求められる。

2008年度も地域スポーツを取り上げ、2009年度にはじめてラグビーを取り上げた。いまから思うと登壇者にはビッグネームが並んでいる。内容的にも充実したものであった。

2008～2009年度は、公開シンポジウムのほかに日本サッカー史に関するシンポジウムに、サロン2002が協力または共催の形で関わった。那智勝浦町で開かれた日本サッカー史シンポジウムは「出張サロン」でもあった。日本サッカーのルーツ校、東京高等師範学校の初代主将、中村覚之助を取り上げたものであり、これまで詳らかでなかったサッカー導入期のことがいろいろわかり、非常に刺激的なシンポジウムであった。2012年度末には大分県臼杵市で「出張サロン」を開き、当地で生まれた日本サッカーの偉人、竹腰重丸の功績を地元の方々に知っていただく場となった。ここでも新しい発見が数多くあった。

2010年度は月例会テーマに「育成期のサッカー」を掲げ、その集大成として公開シンポジウムでも取り上げることにした。演者として想定された方々がいずれも3月初めに堺市で開かれる大学サッカー地域選抜交流戦「デンソーカップ」に参加されることから、その付帯イベントとして、全日本大学サッカー連盟との共催で実施した。かなり大規模なイベントとなった。

2011年度は、ちょうど『高校サッカー90年史』の作成に取り組んでいたことがテーマ設定につながった。何度か取り上げていた日本サッカー史関係の成果を披露する場ともなった。

2012年度の「U-18フットサルを語ろう」は、U-18フットサルトーナメントが行われていたテバオーシャンアリーナの試合後のピッチに演者が登壇、参加者はスタンドという形で開かれた。このシンポジウムが引き金となって、U-18年代のフットサル全国大会が整備される歴史的シンポジウムとなった。JFAフットサル委員長とJFF専務理事が登壇し、現状と今後を共有できたことが大きい。

2013年度は、サロン2002自体が法人化へ向けて激しく動いていたところである。スポーツクラブの法人化は時代の要請であるとともに、サロン2002自体が直面する課題でもあった。2014年度は法人化へ向けての準備や調整のため公開シンポジウムを開催することはなかったが、2015年度、NPO法人として最初のシンポジウムはサロン2002の“志”を掲げて実施するものであった。





## 2. 公開シンポジウム 2016 「日本サッカーのルーツを語ろう！」

### 1) 準備段階

2016年度のシンポジウムは12月17日（土）、筑波大学附属中高敷地内にある「桐陰会館」で開かれた。終了後は同会場にてそのまま懇親会を開くということで準備を進めた。

大学、学校、保護者、同窓会の連携のもと建立された「桐陰会館」の完成報告会が開かれたのは、奇しくもシンポジウムの2年前、2014年12月17日のことである。それ以降、基本的には学校と同窓会関係にしか貸し出されなかったが、2016年度より「外部団体」への貸し出しがはじまり、NPO 法人サロン 2002 として会場確保に動いたのが7月末のこと。8月中に会場確保が決定し、少しずつ構想を練り、9月30日にはスポネットサロンメンバーに向けて次のメールを送信した。

スポネットサロンメンバー（含 NPO サロン会員）各位

今年度の公開シンポジウムの進捗状況報告とご意見伺いです。

すでに皆さまには「12月17日（土）の午後は、筑波大学附属高校敷地内にある桐陰会館にて公開シンポジウムです。テーマは「戦前の日本サッカーを語ろう（仮題）」。

スケジュールをあけておいてください」と案内済みですが、そろそろ具体的な準備に取り掛かりたいと思います。

この企画の発端は、「筑波大学蹴球部創部 120 周年のタイミングで何かできないか」ということでした。加えて、「2018 年は高校サッカー100 周年」「2021 年は JFA100 周年」ということもあり、おそらく各方面で歴史の掘り起こし作業が進められていることでしょう。とくに「戦前（この表現が適切かどうかご意見を）」については、あとになればなるほど「語り部」が減ってしまうので、早めに取り上げたいと考えた次第です。

大まかなイメージとしては、

1) 『あのひと、あのとき—エピソードで綴る筑波大学蹴球部の 120 年』（10 月末発刊予定）より、日本サッカーの導入期から大戦前の日本サッカーのあゆみを東京高師（含高師附）を中心に振り返る

【キーワード】坪井玄道、中村覚之助、YC&AC、「赴任地にゴールポストを」、極東選手権、ユース大会（招待大会）、JFA 創設、内野台嶺、新田純興、鈴木重義、チョウディン、等

2) 日本のスポーツを特徴づける「学校体育（体育の授業、体育的行事、運動部活動）」の源流である東京高師と嘉納治五郎の功績について振り返り、日本サッカー（スポーツ）界の「いま」につなげる

【キーワード】東京高師、嘉納治五郎、クーベルタン、オリンピズム、日体協、金栗四三、留学生、大学昇格運動、大正デモクラシー、関東大震災、等

3) 東京以外の地域の展開例として、戦前の関西サッカーを取り上げる。とくに神戸・広島サッカーと外国人の関係等

【キーワード】KR&AC、日本フットボール大会、神戸一中、御影師範、チョウディン、河本春男、広島一中、同志社、明星、ドイツ軍捕虜、ロシア革命とチェコ軍、朝鮮半島、明治神宮大会、等

4) 戦前の日本サッカーを語る上でのトピック（今後の課題）

【キーワード】高橋忠次郎（日体大 OB）、丸亀高女（戦前の女子サッカー）、竹腰重丸、サッカー協会の組織改革（クーデター）、等

1) は中塚が話をします（30 分ぐらいほしい）

2) は、筑波大学体育専門学群長でスポーツ史研究者の真田久氏に登壇依頼済

3) は、賀川浩さんにご登壇いただけないかと考えます。

4) は、牛木さんにご登壇いただき、幅広く議論するきっかけになればと考えます。

以上、本件についての第一案です。（略）10 月中旬には大枠を固めたいと思います。



演者の内諾も得られ、内容面での調整をメール等で進めていった。また何度かシンポジウム担当者のミーティングを開き、運営面と内容面についての意見交換をした。

当初は「戦前の日本サッカーを語ろう（仮題）」だったテーマは「日本サッカーのルーツを語ろう」となり、「東京高等師範学校の足跡を中心に」をサブテーマとして焦点を明確化した。

また、以下の4団体に後援申請をし、大々的に告知することとした。

- ・筑波大学蹴球部同窓会茗友サッカークラブ
- ・(公財)日本サッカー協会
- ・日本サッカーミュージアム
- ・横浜カントリーアンドアスレチッククラブ(YC&AC)

通信社や新聞社へも案内を送り facebook も活用したが、告知についてはまだまだ改善の余地がある。

## 2) シンポジウム概要

オープニングで嘉納治五郎の紹介映像と日本サッカーのあゆみを振り返るスライドをみてシンポジウムはスタートした。BGMとして用意したビートルズの「ヘイ・ジュード」がうまく流れなかったのは誤算であった(柔道と掛けたのだが…)。

総合司会は笹原勉。シンポジウムの進行は中塚義実。

まずは牛木素吉郎氏が「日本へのサッカーの移入」というテーマで約25分間、話をされた。大枠は、①日本のサッカーの始まりは東京高師の中村覚之助から。②日本のサッカーの普及は東京高師卒業生による。③学校によるスポーツ普及について、である。日本にサッカーが移入されたのは「1873(明治6)年に海軍兵学寮(築地)で、ダグラス少佐が教える」のが最初だとされているが、その通説は「新田純興『日本サッカーの歩み』(講談社)によって広まる。その後の普及、発展にはつながっていない」と指摘。「サッカーの日本への本格的紹介は、明治中期以降(学校体育の教材として)。サッカーの試合が本格的に行われたのは1904(明治37)年の東京高師対横浜外人の試合以降」であることを強調され、その試合を企画した東京高師初代主将の中村覚之助の功績を紹介された。東京高師卒業生の赴任した中等学校、師範学校にサッカーが広まっていくが、「高師卒業生の赴任先指定が意図的であったのではないか。サッカー出身者は温暖な地方に着任し、バスケットボール出身者は体育館を設備した寒冷地(新潟など)に派遣したのでは?」との推測を述べられた。

続いて筑波大学体育専門学群長でスポーツ史研究者の真田久氏が、「嘉納治五郎校長時代の東京高師」についてスライドを用いて紹介された。柔道の創始者として知られる嘉納治五郎は、アジア初のIOC委員であり、東京高等師範学校の校長を長く務めた教育者である。東京高師において、①体育科の設置(体育を他教科と同様の地位に高め、多くの指導者を輩出した)、②課外活動の奨励(学生自身のスポーツ活動を奨励。全国に部活動を広める礎を築いた)、③留学生の体育・スポーツを奨励(中国や朝鮮半島から多くの留学生を受け入れ、体育・スポーツに積極的に取り組ませた)の観点から嘉納校長の功績を紹介した。「高師の嘉納か、嘉納の高師か」と言われるほど、嘉納の教えが東京高師の学生に浸透し、日本の体育・スポーツ発展の源流となる。蹴球部ももちろんその流れを汲むものであるとのご指摘であった。

ここからは中塚がスライドを用いながら、東京高師卒業生の全国へのサッカー普及のあゆみ、そして戦前の日本サッカーの大まかなあゆみを、主に賀川浩氏とやり取りをしながら進めていった。

賀川氏は、①神戸のサッカーと河本春男先生(ユーハイム元社長。刈谷中から東京高師で主将を務め神戸一中に赴任した河本氏の下宿先は賀川さんのご近所。戦前の神戸一中の黄金期をささえた)、②ビルマからの留学生チョウディン(日本サッカーに「ショートパス」という技術革命をもたらした。早稲田を皮切りに全国各地でサッカー指導。戦前のレベルアップに貢献)、③朝鮮半島へのライバル意識(日本の植民地であったソウルやピョンヤンの学校とのライバル意識)、④戦前の日本代表チーム(1917年の極東選手権大会に東京高師メンバーで初参加。1930年の大会で初優勝。1936年ベルリン五輪をめぐる)などについて、ご自身の体験をもとに話をされた。このほか、日本サッカー協会創



設にまつわる話、中等学校の全国大会のことなど、話題は多岐に及ぶ。

戦後すぐの1946年5月5日、東大御殿下グラウンドで行われた全日本選手権決勝で東大LBに敗れた神経大クラブのフォワードに、賀川兄弟の名前がある。

戦争が終わってとにかく死なずに帰ってきて、再びサッカーをやり始めたころです。(中略) 指定の夜行列車に乗ったら乗客が多く、みんなデッキまではみ出していました。デッキで立ち寝してもあるいはデッキに横になって寝てもいいのですが、お客さんの赤ちゃんが夜中泣き出してですね、みんな立ったまま東京までやってきて、関東協会の乗富理事長のお宅に泊まりました。理事長には非常に歓待を受け、そのお宅では久しぶりに仲間とサッカーの話ができて、みんな骨抜きになってしまい、試合に来たのか分からないような様子になったのですね。

そして試合会場である東大に行って、いきなりキックオフです。(中略) いきなり則武と名越が足を痛めてピッチを出てしまい、9人になりました。9人になれば、いくら私の兄の賀川太郎がひとり頑張ってもいい加減な試合になってしまい、結局6-2で大敗しました。以来、東大とは相性が悪く、その後、朝日招待で対戦した際もたくさん点を入れられて負けてしまいました。

大敗はしましたが、当時の状況としては、みんな戦争から帰ってきたばかりで、嬉しかったのです。文科系の大学ですからね。早稲田や東大でしたら理科系の学生も残っていましたが、ほとんどみんな兵隊から帰ってきて初めて顔を合わせて、サッカーの話を一晩中できるものだから。一晩中サッカーの話をし、まったく戦闘意欲に欠けた試合をしてしまいました。我ながら「いやあ、もったいないことをしたなあ」と思っております。まあそれでも、東大の縦の強さというか、そういうものはよくわかりました。

わかりましたけど、「なんでこんな狭いグラウンドで試合せにゃならんのだ!」というのは当時の一番の感想でしたね。  
(公開シンポジウム 2016 報告書より)。

この試合の前座で、中等学校の東西王座決定戦が行われ、東京高師附属中が1-0で神戸一中に勝った試合のことも『天皇杯 65 年史』に紹介されている。シンポジウム会場には、当時の附属中監督(学生監督)であった小栗純二氏が来場されており、コメントをいただいた。

このほか、YC&ACの細貝貞夫氏からは、開国後の尊王攘夷の時代に日本にやってきた外国人が、自分たちの愛するスポーツに文字通り命を懸けて取り組んでいた様子が紹介された。若友サッカークラブ会長の松本光弘氏からは、創部120周年事業を通して大戦前の日本サッカーの様子が明らかになってきたのは大きな成果であると語られた。

終了後の懇親会では、東京高師蹴球部OBの張希飛氏の御息子が紹介され、「中国人の父がなぜ東京高師にいたのかがわかった」とコメント。またベルリン五輪代表チーム主将の竹内悌三氏のご長男である竹内宣之氏(東京教育大附属OB)が「二人の息子には附属でサッカーをさせる」との父の遺言に沿って附属でサッカー人生を歩んだことが紹介された。竹内氏と松本光弘氏は同世代で、全国大会の関東予選で東教大附属高と浦和高が対戦した試合があるとの話で盛り上がっていた。

当日参加できなかったが、シンポジウム前日に筑波大学名誉教授の後藤邦夫氏が中塚を訪ねて来られた。後藤氏は筑波大学女子サッカー部の部長を長く務められた方で、附属高校71回卒業生でもある。この日はあいにくお会いすることはできなかったが、後藤岩夫氏の「昭和13年度 関東蹴球協会客員章」を事務室に預けていかれた。後藤岩夫氏は戦前最後の東京高師蹴球部長。後藤邦夫氏のお父さんがその方だった。

戦後最初の蹴球部長は阿部三亥氏。その息子の阿部生雄氏も筑波大学附属中学校長・附属学校教育長を務めた方で、附属高校72回卒業生。後藤邦夫氏とともに東京教育大学体育学部で学生時代を過ごされた方である。戦前戦後の蹴球部長がいずれも附属OBの父親だったことに驚いた。

思わぬ人のつながりを楽しむことができたシンポジウムであった。

シンポジウム後は同会場で懇親会。安藤裕一氏の進行で、参加者全員からコメントをいただくなど、和気あいあいとした雰囲気でも末の夜を楽しんだ。遠山諒、春日大樹、大河原誠二の諸氏が裏方として力を発揮してくれた。



### 3) シンポジウムの運営

運営面での振り返りを行った。主に話題になったのは「報告書の販売」と「告知」についてである。以下、やり取りの形で記録にとどめる。

岸：シンポジウム報告書のバックナンバーを1冊500円で販売してしまったのはミスだった。

中塚：法人化する前の報告書は無料で配るつもりだった。NPOになる前の資産については引き継ぎを終えている。これを販売するのはNGではないか。

茅野：旧サロンの資産を引き継いだのはもちろんだが、以前の報告書が売れた場合、収入に計上してよいのではないか。古新聞と同じ。資産として管理はしないが、売ればそれは収入になる。

笹原：販売するものではないが、売れば雑収入として計上する。

中塚：過去の報告書を改めて読むとすごく面白いしよくできている。しかしいっぱい残っていてももったいない。何とかしたい。

笹原：今回ものすごく告知した。メディアへの露出はどうだったか。何人かの記者にも来ていただいたが、どこかに載ったのか。

中塚：「体育施設」という雑誌に、大きくはないが紹介された。

岸：これまでの登壇者や参加者をみると、いまあまりいらしていない方が大勢おられる。最近来られていない方が集まるようなシンポジウムが、20周年でできるとよい。

中塚：この20年間で関わった方が来られるようなシンポジウムができるとよい。鈴木崇正さんとか…

茅野：高橋義雄先生もずいぶんかかわっていたのですね。

中塚：高橋義雄さんには副理事長をやってもらったこともある。中核メンバーだった。

笹原：横浜でよく行く飲み屋があって、マスターは横浜サッカー協会の事情通。その人が今回シンポジウムに来てくれた。辛口の彼が言っていたのは、「あれは筑波大の同窓会の集まりだな」ということ。あとその人が言っていたのは「1,000円なら出すけど2,000円は高い」。

中塚：交通費をかけて来る人にとってみれば高いと感じるかもしれない。月例会が1,000円。それよりも高くという程度の設定だが。

笹原：何とかして事前に、サロンのメディアだけでなく公共のメディアで告知できればと思ったが。

春日：facebookに有料の告知がある。お金をいくら払ってキーワードを設定すれば、ランダムに「あなたにおススメの記事」というのがタイムラインに出てくる。いま若い人を捕まえるのだったらこの方法は有効。「いいね」を押すとさらにその友達に飛ぶ。いまのページで3,000人ぐらいリーチしているが、これを使えばもっと広げられる。



小池：1200 円で 9 万人。ターゲットを選ぶこともできる。年齢や地域も選べる。

中塚：「ふーん」としか言いようがないな。

小池：サッカーダイジェストは広告を出してもらえる。

中塚：今回の参加者は 70 名あまり。72 人。これまでに比べれば来た方か。けど目標は 200 人だった。もっと人を集めて盛り上げたい。

#### 4) 報告書について

報告書編集長の春日大樹氏から、3 月中の発行を目指して「がんばります」との意思が表明された。

シンポジウム編は、当日参加していた筑波大生が鋭意進めているが、寄稿編の執筆者が決まっておらず、意見交換した。後藤邦夫さん、竹内宣之さん、YC&AC の細貝貞夫さん、東京高師 OB の張希飛さんの御子息（張寿山さん）が候補として挙がり、打診することとなった。

### 3. これからの「公開シンポジウム」

2017 年度については「サロン 2002 の 20 年を語ろう（仮題）」と題して、日本のサッカー界、スポーツ界の劇的変化と、その中でサロン 2002 そのものがどう変化してきたのかについても取り上げたい。この場でも少しだけ意見交換した。

中塚：来年度のシンポジウムは、名称はともかく、おおむねテーマは決まっています。あとは時期や会場ですね。

笹原：「サロン 2002 の 20 年を語ろう（仮題）」だと内向きな印象がある。

中塚：もちろんサロンの内側のことを取り上げるだけではない。むしろこの 20 年に起きたさまざまなことを幅広く取り上げたい。いいキャッチコピーを考えよう。6 月の月例会が第 250 回になるのでその前後、夏休みぐらいか。けど去年やったように年末も悪くはない。

春日：あまり年末に近づくと J のいろんな日程と重なって動きにくい。

中塚：9 時を回ったからこのあたりの話は場所を変えてやりましょうか…

(続きは「景宜軒」にて)



## <2017年3月月例会報告>

\*\*\*\*\*

# NPO サロンの事業を考える② —U-18 フットサル—

中塚 義実 (NPO 法人サロン 2002 理事長/筑波大学附属高等学校)  
本多 克己 (NPO 法人サロン 2002 理事/(株)シックス)

\*\*\*\*\*

- 【日 時】 2017年3月29日(水) 18:30~20:40 (終了後は近くの中華屋で懇親会 ~0:30すぎ)  
【会 場】 すみだ産業会館 会議室5 (〒130-0022 東京都墨田区江東橋3丁目9-10)  
【テーマ】 NPO サロンの事業を考える②—U-18 フットサル  
【演 者】 中塚義実 (NPO 法人サロン 2002 理事長/筑波大学附属高校)、本多克己 (株シックス)  
【参加者 (会員・メンバー) 7名】  
奥山純一 (フットリンク運営者)、賀川浩 (スポーツジャーナリスト)、岸卓巨 (日本スポーツ振興センター)、小池正通 (La Esperanza Foundation)、小山基彰 (ヒーローインタビュー)、中塚義実 (筑波大学附属高校)、本多克己 (株シックス)  
【参加者 (未会員) 4名】 大友洋介 (武相高校フットサル部顧問)、橘和徳 (U-18 富山県フットサル選抜監督/富山いずみ高校/筑波大32期生)、永松慎二、国島栄市 (ビバ!サッカー研究会)  
【2次会からの参加】 齋藤宣彰 (会社役員)、今廣佳郎 (会社員)、佐藤いちろう (靴郎堂本店)  
【報告書作成者】 中塚義実、本多克己

### <目 次>

はじめに

#### I. サロン 2002 とフットサル (中塚)

1. フットサルの誕生とあゆみ
2. サロン 2002 の誕生とあゆみ
3. サロン 2002 月例会で取り上げられたフットサル

#### II. U-18 フットサルのあゆみと現状

1. 東京都における U-18 フットサル大会 (中塚)
2. 全国へ向けての情報発信と U-18 リーグの創設 (中塚)
3. 全国大会開催へ向けて (本多)
4. 各地の現状 (情報交換)

#### III. これからの U-18 フットサルと NPO 法人サロン 2002

NPO 法人サロン 2002 理事会 2016-5 (2017年3月10日) 資料より一部転載

補足資料. 富山県の U-18 フットサル

「茗友 SC 通信 2017年3月号」(2017年4月2日) より転載





## はじめに (中塚)

NPO 法人サロン 2002 の前身は、1980 年代後半にはじまるサッカーの研究会です。だからサロン 2002 にはサッカー関係の人や話題が多いのですが、1990 年代半ばに FIFA のリードで「誕生」したフットサルにも、初期のころから多くのサロン会員が関わってきました。過去の月例会で「フットサル」が何度も取り上げられていることからわかります（本文末【参考】をご参照ください）。

中でも U-18 年代のフットサルは、オフィシャル大会の整備が遅れたこともあり、サロン 2002 会員が積極的に支援してきたカテゴリーです。2014 年度の NPO 法人化以降は事業の担い手として、より積極的に関与するようになりました。

ここ数年で急速に整備が進んだ U-18 フットサル。“理念”を掲げて“熱き思い”で突っ走ってききましたが、これからは“現実”を見据えた上で、多くの方の理解を得ながら“継続と発展”を目指していく段階です。

ちょうど墨田区総合体育館で「ユースフットサル選抜トーナメント 2017」が開かれ、全国から U-18 フットサル関係者が集まります。NPO サロンの月例会で、さまざまな立場の方とともに U-18 フットサルの現状と課題を共有し、今後について意見交換できればと考えます。

## I. サロン 2002 とフットサル (中塚)

### 1. フットサルの誕生とあゆみ

ここにお集まりの皆さんには釈迦に説法だと思いますが、念のため「フットサル」の誕生とあゆみについておさらいしておきましょう。

近代スポーツとしてサッカーが誕生して以降、11 人制のサッカーが世界中に広まります。しかしもちろん 11 人でなければいけないわけではありません。集まった人数に応じて、その場にあったミニサッカーを人々は楽しめます。冬に屋外へ出られない国の人々はインドアサッカーを楽しみ、南米の人々はサロンフットボールの名称で楽しむようになり、それぞれに国際的な組織もありました。それらの統ルールを制定し、自らの傘下に収めようとした FIFA が、1994 年に「フットサル」を定めたというわけです。

FIFA という化け物組織の決定は、瞬く間に全世界に伝わります。同年、JFA はミニサッカー委員会をフットサル委員会とし、翌 1995 年、各都道府県にフットサル担当者を置くこととなり、東京都でも委員会が組織されます。東京都の初代委員長は、当時成城大学にいた小野剛氏でした。私は最初から 2 種担当ということで東京都の委員会メンバーです。当時のメンバーで今でも残っているのは私だけです。ちなみにフットサル委員をやってくれないかという打診は、当時東京都高体連サッカー専門部長だった上野二三一さんからで、場所は富山市の夜の町でした。富山で高校総体があったとき、私は JFA 科学研究委員会の社会調査班のメンバーとして富山に赴き、「J リーグ発足にともなうユースサッカーの変化」についての意識調査を、高校総体出場チームの監督・選手に行っていたところでした。

### 「フットサル」の誕生

- ◆1863年 FA創設 ...近代スポーツとしてのサッカーの誕生
  - ◆1904年 FIFA創設 ...世界のサッカーの統括団体
  - ◆1930年 第1回FIFAワールドカップ開催
  - 世界各地に「ミニサッカー」があった**
  - ◆1989年 第1回ファイブ・ア・サイド・フットボール世界大会
  - ◆1994年  
FIFAが、「ファイブ・ア・サイド・フットボール」を「フットサル」に変更
  - JFAが、「ミニサッカー委員会」を「フットサル委員会」に変更
  - ◆1995年  
JFAが、各都道府県に「フットサル担当者」を置くよう指示
  - 3つの全国大会を開催
  - ・全日本少年フットサル大会(既存の大会)
  - ・全日本ジュニアユースフットサル大会(新設)
  - ・全日本フットサル選手権大会(16歳以上)(新設)
- ※U-18年代は当初から、大人のカテゴリーに含めて考えられていた

昼間の仕事を終えて仲間と町へ繰り出し、戻ってきたところでばったり上野さんにお会いし、「今度フットサル委員会に人を出さないといけないんだ。中塚君、やってくれないか」と。

ここから始まっています。

フットサル委員会の仕事は、まずは全国大会予選の開催です。少年の大会は既存のミニサッカー大会の名称が変わったもので、このタイミングで新設されたのはU-15と大人の大会です。U-18については大人のカテゴリーに含めるということで、新たに創設されることはありませんでした。高体連やCY連盟の大会でスケジュールがいっぱいで、手がまわらなかったのだらうと思います。

## 2. サロン2002の誕生とあゆみ

サロン2002も同じころ誕生します。前述のJFA科学研究委員会の中で主に社会調査を行っていたグループが、「社・心グループ」の名称で勉強会を定期的を開くようになりました。80年代後半のことです。

90年代に入ると、プロサッカー誕生の動きが激しくなり、1993年のJリーグ発足につながります。さらに1995年には2002年のFIFAワールドカップ共催が決まり、先ほどのフットサルの誕生もあって、するスポーツとしてもみるスポーツとしても、サッカー周辺が劇的に変化してきます。さらにインターネットが普及し、たとえば月例会案内を郵便ではなく、メールでポンと送れるようになりました。

このような中で、「社・心グループ」の月例会にはさまざまな人が集まるようになり、研究者の集まりだった「社・心グループ」を発展的に解消し、1997年から「サロン2002」の名称で、主に筑波大学附属高校で月例会を行うようになったのです。

サロン2002はゆるやかなネットワークとしてずっと続いていましたが、「これでいいのか」は常に問い続けてきました。そして、「事務局機能を強化したい!」「組織としての姿がみえるようにしたい!」「事業の担い手としての“サロン2002”になっていきたい!」との願いから、法人化の道を歩みます。

右のスライドは法人化前の、スポーツ文化研究会サロン2002の様子です。中心も周縁もないゆるやかなネットワークです。具体的な事業にも取り組みますが、理事長の“個人商店”の域を出ることはありませんでした。

法人化の方向性について議論を重ね、特定非営利活動法人(NPO法人)を目指すことになりました。

### サロン2002のあゆみ

JFA科学研究委員会のサブグループ「社・心グループ」が前身  
(1980年代後半から定期的に活動)

- ◆サッカー界の劇的変化
  - ・Jリーグ発足
  - ・2002年FIFAワールドカップ招致活動~開催
  - ・フットサルの誕生
- ◆インターネットの普及
  - ・全国各地の“同志”がネットワーク化
  - ・ネットワークを「フットワーク」につなげるマインドと活動

↓

「サロン2002」としてリスタート(1997年度)

2000年度より会員制導入(一口会員は3,000円。それ以上を定める)  
2010年度より会費は3,000円/年(それ以上は寄付金扱い)  
2013年度は全国に約180名の会員が

主な活動は、月例会、公開シンポジウム、(いわゆる)出張サロン等

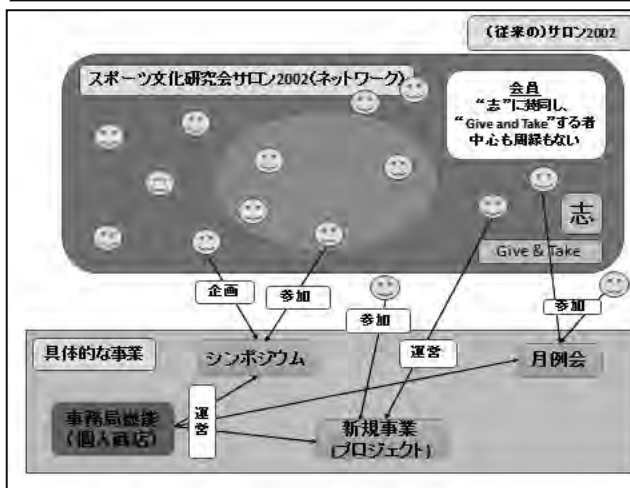
### サロン2002の“これから”

-2013年4月例会資料(一部改編)

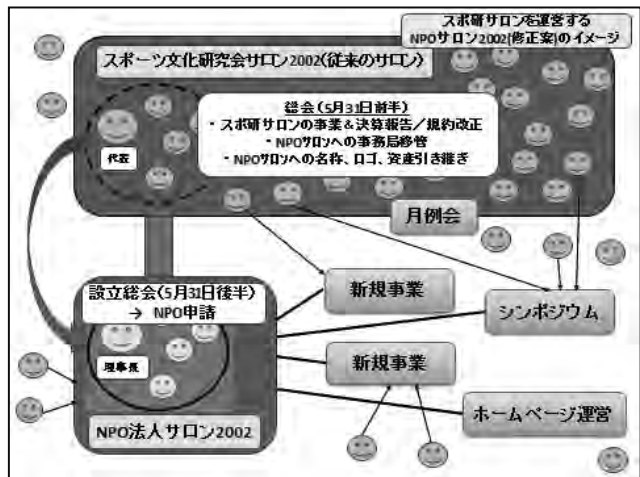
- ◆事務局機能を強化したい!  
“プロ意識を持ったボランティア”と、“ボランティア精神を持ったプロ”で運営してきたが、いまのままだと、現状が限界。いっ以上を求めるなら、事務局機能の強化は不可欠!  
(“中塚個人商店”の限界)
- ◆組織としての姿がみえるようにしたい!  
・他の組織と連携を図る際、法的にも対等の姿で対応したい。  
「いったいあなた方は何者ですか?」に答えられるように  
・補助金等の受け皿となれるようにしておきたい。
- ◆事業の担い手としての“サロン2002”となっていきたい!  
・月例会、公開シンポジウム、出張サロンなど、これまでやってきた事業は継続する  
→より規模を拡大して実施できる  
・“ゆたかなくらし”を志向する良い活動の担い手となりたい  
例)DUOリーグの事務局をサロン2002が担う → 可能か?  
例)「リサイクルプロジェクト」「スキッププロジェクト」を担う → 可能か?  
例)「オリンピック教育」「U-18フットサル」を他の機関と連携して進める → 可能か?

↓

「(NPO)法人化」について踏み切る? → いまでしょ!



途中経過はすべて省略しますが、とにかく2014年5月の総会でNPO法人サロン2002が誕生します。いまでは右のスライドのようになっており、従来のネットワークを運営したり、さまざまな事業の担い手となるできるようになりました。もちろん toto などの助成を受けることもできます。



### 3. サロン 2002 月例会で取り上げられたフットサル

NPO 法人化以前から、サロン 2002 の月例会ではフットサルが何度も取り上げられています。

以下は月例会で取り上げられたテーマ一覧です。新しいものから遡って記します。

2013年3月の公開シンポジウムは、オーシャンアリーナで開かれた「U-18 フットサルトーナメント」の中日に開いたもので、当時の JFA フットサル委員長と JFF 専務理事が登壇してくださいました。このシンポジウムがきっかけとなって JFA 主催 U-18 大会が始まるという、歴史的なシンポジウムとなったと思います。

ほかにも、トリムカップのはじまりの話や、フットサル連盟のあり方についてプロジェクトチームを作って議論していたことなどが思い出されます。

#### 【参考】サロン 2002 月例会で取り上げられた「フットサル」の話題（2000 年度以降）

- ・ 2013年3月 公開シンポジウム「U-18 フットサルを語ろう！」  
[http://www.salon2002.net/src/pdf/symposium/2012\\_sympo.pdf](http://www.salon2002.net/src/pdf/symposium/2012_sympo.pdf)
- ・ 2012年11月 徳田仁「FIFA フットサルワールドカップ報告会」  
[http://www.salon2002.net/src/pdf/monthly\\_report/2012/2012-11.pdf](http://www.salon2002.net/src/pdf/monthly_report/2012/2012-11.pdf)
- ・ 2012年9月 山下則之「フットサルの育成と国際交流ードイツ・ジャパン・スポアアカデミーを中心に」  
[http://www.salon2002.net/src/pdf/monthly\\_report/2012/2012-9.pdf](http://www.salon2002.net/src/pdf/monthly_report/2012/2012-9.pdf)
- ・ 2012年4月 中塚義実「U-18 年代のフットサルー2001 東京、2012 名古屋、そして未来へ」  
[http://www.salon2002.net/src/pdf/monthly\\_report/2012/2012-4.pdf](http://www.salon2002.net/src/pdf/monthly_report/2012/2012-4.pdf)
- ・ 2008年3月 成田十次郎「成田十次郎先生にきくー高知・日本・ドイツのサッカーとトリムカップ」  
[http://www.salon2002.net/src/pdf/monthly\\_report/2008/2008-3.pdf](http://www.salon2002.net/src/pdf/monthly_report/2008/2008-3.pdf)
- ・ 2008年2月 野口良治「東京都からみた日本のフットサルのこれまでとこれから」  
[http://www.salon2002.net/src/pdf/monthly\\_report/2008/2008-2.pdf](http://www.salon2002.net/src/pdf/monthly_report/2008/2008-2.pdf)
- ・ 2007年9月 「F リーグ開幕を祝して乾杯」  
[http://www.salon2002.net/src/pdf/monthly\\_report/2007/2007-9.pdf](http://www.salon2002.net/src/pdf/monthly_report/2007/2007-9.pdf)
- ・ 2007年4月 中塚義実「地方からみたレディースフットサルの現状と今後ートリムカップ・レディースフットサル大会をめぐる」  
[http://www.salon2002.net/src/pdf/monthly\\_report/2007/2007-4.pdf](http://www.salon2002.net/src/pdf/monthly_report/2007/2007-4.pdf)
- ・ 2004年4月 中塚義実・本多克己「2004 年春のフットサル報告会」  
[http://www.salon2002.net/src/pdf/monthly\\_report/2004/2004-4.pdf](http://www.salon2002.net/src/pdf/monthly_report/2004/2004-4.pdf)
- ・ 2003年11月 本多克己「フットサル界の現状と課題」  
[http://www.salon2002.net/src/pdf/monthly\\_report/2003/2003-11.pdf](http://www.salon2002.net/src/pdf/monthly_report/2003/2003-11.pdf)

- ・2002年9月 澤井和彦「フットサルプロジェクトⅡ実施上の問題点」  
[http://www.salon2002.net/src/pdf/monthly\\_report/2002/2002-9.pdf](http://www.salon2002.net/src/pdf/monthly_report/2002/2002-9.pdf)
- ・2001年2月 梶野政志「2001年のフットサル連盟」  
[http://www.salon2002.net/src/pdf/monthly\\_report/2001/2001-2.pdf](http://www.salon2002.net/src/pdf/monthly_report/2001/2001-2.pdf)
- ・2000年12月 フットサルプロジェクトⅠ「フットサル連盟は必要かー21世紀のスポーツと競技団体のあり方」 [http://www.salon2002.net/src/pdf/monthly\\_report/2000/2000-12.pdf](http://www.salon2002.net/src/pdf/monthly_report/2000/2000-12.pdf)
- ・2000年10月 フットサルプロジェクトⅠ「サロン2002フットサルプロジェクト1の展望と課題ーフットサルの現状と連盟の意義」 [http://www.salon2002.net/src/pdf/monthly\\_report/2000/2000-10.pdf](http://www.salon2002.net/src/pdf/monthly_report/2000/2000-10.pdf)

### 【参考】サロン2002「フットサルプロジェクト」立ち上げ宣言

サロン2002会員各位

2000.10.2.(中塚義実)ー一部改編

サロンのフットサルプロジェクトの立ち上げを宣言します。サロンにとって最初のプロジェクトでもありますので、今回の立ち上げに至った手順を先にご説明し、次にプロジェクトの概要を紹介します。参加してみようという方は、プロジェクト事務局を担当していただく川前真一氏にメールで申し込んで下さい。プロジェクトの第1回会合は10月17日(火)19:00より、筑波大学附属高校会議室で行います。10月例会は本プロジェクトからの話題提供とします。

#### <プロジェクト立ち上げの手順>

- 1) 解決すべき課題の存在
- 2) その課題をサロンで(サロンの人材で)解決しようと考え、行動を開始する発起人の存在
- 3) 発起人によるプロジェクト概要の検討
- 4) 発起人から会員へ向けての、プロジェクト立ち上げの通知及びメンバーの募集
- 5) プロジェクトの活動開始
- 6) 何らかのアウトプット

サロンの公認プロジェクトであるためには、このプロセスのどこかの段階で役員会の承認が必要。

#### <今回提案するプロジェクトについて>

今回提案するプロジェクトは、既に3)までは進行している。最初のプロジェクトでもあるし、会員全体に対してアナウンスしたいということもあるので、現段階、すなわち3)と4)の間で役員会での承認を求めたい。

#### <プロジェクト概要>

プロジェクト名：サロン2002フットサル・プロジェクト1(フソ)

発起人：川前真一(東京ベイフットサルクラブ)、

野口良治(東京都サッカー協会)、

中塚義実(東京都サッカー協会フットサル委員)

目的：首都圏のフットサル事情、および21世紀のスポーツ組織のあるべき姿を探りながら、「東京都フットサル連盟」設立への有効なアドバイスを行う。具体的には、以下のレポートを作成し、(財)東京都サッカー協会へ提出する。提出期限は、1については12月末まで、2については3月末まで(このタイミングであれば、2001年度設立の準備資料として有効)

- 1-1) 東京におけるフットサルの現状と課題

フットサル人口・施設等のデータ/参加者のニーズの把握など

- 1-2) 連盟設立の意義(どういう連盟なら意義があるか)と組織(登録の仕組みなど)試案

- 2) フットサル連盟の運営と今後の方向性



期間：2000年10月～2001年3月

背景：日本におけるフットサル振興政策の推進母体である日本フットサル連盟は、2000年度より改組再編され、各都道府県連盟を統括する団体となった。これを受けて各都道府県でも「フットサル連盟」を組織すべく動いているが、兵庫県など一部の例外を除けば、必ずしも実情に合った組織化が進んでいるとは言いがたい。

東京都サッカー協会フットサル委員会では、1999年度末より連盟設立準備委員会で検討を進めてきた。東京では民間施設が先行してフットサルに取り組んできた事情もあり、従来の競技団体的思考に基づいてフットサル連盟を設立させるには無理がある。また、21世紀にふさわしいスポーツ組織のあり方の検討も不可欠である。そのためにも「協会関係者」だけでの検討には限界がある。

サロン2002の会員には、フットサルにかかわっている方が大勢いる。これらのパワーを結集すれば大きな力となるだろう。サロン2002のプロジェクトとして立ち上げようとした意図はここにある。

まずは具体的な課題からということで、「東京」を対象として検討したい。プロジェクトにおける課題はできるだけ具体的な方が良いということと、東京に人材が集中しており、取り組みやすいと考えたからである。ただし他地域、他種目の情報は不可欠であるし、今後これらへの展開も期待できる。

### <今後の可能性>

本プロジェクトの方法論を用いて、他の地域を対象に、あるいは他種目を対象に新たなプロジェクトを立ち上げることは可能である。またフットサルに関連しては、今後も様々なテーマを見出すことができよう。「フットサルプロジェクト1」の活動を続ける中で次の課題が見つければ、「フットサルプロジェクト2」として新たにプロジェクトを立ち上げ、メンバーを募集する。このような形でプロジェクト自体を進めながら、様々なアウトプットと、かかわった人たちのネットワークづくりが可能。

## II. U-18 フットサルのあゆみと現状

### 1. 東京都における U-18 フットサル大会（中塚）

2000年度末の東京都サッカー協会(TFA)フットサル委員会で、3種部会長の徳田仁氏((株)セリエ)が「都内の民間施設で高校生が大勢プレーしている」という話をされました。サッカー部をはじかれた高校生が、学校ではできないので、都内にでき始めた民間施設でフットサルを楽しんでいるとのことでした。

私の勤務する筑波大学附属高校でも、W杯フランス大会出場が決まったところから昼休みサッカー人口が激増し、サッカー部の中にフットサル部門ができ、昼休みの「校内フットサル大会」を企画するようになっていました。また高体連の大会で、部員不足から出られないという学校が目立つようになり、「フットサルなら出られるのに」と思ったものでした。

こうした意見交換をする中で、TFA 公認の U-18 フットサル大会を開こうということになり、2001年夏、小金井市総合体育館ではじめてのフットサル大会が開かれました。その年の冬にも大会を開き、それ以降、年2回の U-18 大会は東京都で定着していきます。

東京都における  
**U-18フットサル大会創設の経緯**  
それは2000年度末、フットサル委員会の議論から始まった

- ◆「都内の民間フットサル施設で、高校生が大勢プレーしている」  
↳ 潜在的なフットサル人口の存在
- ◆「いくつかの学校ではフットサル同好会ができている」
  - ・筑波大学附属高校サッカー部に「フットサル部門」創設(1997)
  - ・同校において校内フットサル大会(TFC杯)開始(1998)
  - ↳ 学校におけるフットサルの可能性 ↳ 仕掛ければ広まる!
- ◆「高体連のサッカー大会で、  
人数不足により参加できないチームが増えてきた」  
↳ 11人は無理でも5人ならサッカーとの共存・共栄

↓

★2001年度事業として、夏にU-18フットサル大会を開催しよう!  
★「東京都ユース(U-18)サッカーリーグ(仮称)」と連動させよう!

<p>東京都FA主催 <b>U-18公認フットサル大会</b> (最初の2年間)</p> <p>■2001年度</p> <p>夏...第1回東京都ユース(U-18)フットサル大会</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・初心者でも参加でき、最後まで楽しめる競技会に!</li> <li>・「第51回 社会を明るくする運動」事業として開催</li> </ul> <p>冬...第1回東京都フットサルチャレンジ(U-18)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・サッカークラブも、オフシーズンのトレーニングとして参加</li> <li>・将来的には、真のフットサル東京一を決する競技会へ</li> <li>・スケジュール問題と会場確保の問題</li> </ul> <p>■2002年度</p> <p>夏...第2回東京都フットサルチャレンジ(U-18)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・名称と大会の運営を合致させる</li> </ul> <p>冬...第2回東京都ユース(U-18)フットサル大会</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・U-15、U-18同時開催により、ユース年代の交流促進!</li> <li>・判定に対するトラブル続出!</li> <li>・学校教育活動か、地域のスポーツ活動か</li> </ul>	<p><b>U-18大会をはじめてどうなったか?</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・はじめの頃は「やんちゃな奴ら」が「多様なチーム」で参加</li> <li>・「責任能力のある大人」の帯同を求める(今でも)</li> </ul> <p style="text-align: center;">↓</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・学校のフットサル部・同好会、地域のフットサルクラブが増え、レベルが上がってきた。</li> <li>・この大会のために編成された「多様なチーム」も参加。</li> <li>・冬の大会にはサッカー部、サッカークラブも参加。</li> <li>・「もっとやりたい者」「もっとやらせたい者」が増えてきた</li> </ul> <p style="text-align: center;">↓</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・東京の取り組みを全国に発信しよう!</li> <li>・発信しながら、今後の方向性をさぐる!</li> </ul>
--	---

U-18 大会をはじめた当初は、「やんちゃな奴ら」が「多様なチーム」で参加する、運営側としてはやりにくいものでした。不平不満を審判や相手にぶついたり、ものを壊すことはしょっちゅうでした。「責任能力のある大人」についてもらい、ともに指導していくことを代表者会議で訴え続け、少しずつ変わってきました。そしてそのうち、年2回の大会だけでは物足りなくなるところが出てきはじめ、「リーグ」の組織につながっていきます。

## 2. 全国へ向けての情報発信と U-18 リーグ (中塚)

同じころ、この試みを全国に発信するチャンスがありました。JFA のトライアル FA 制度で、これに応募して補助金をもらい、自分たちの取り組みを冊子にして全国に発信することを3年間続けました。担当者が集まるジョイント・ミーティングでも東京都の U-18 大会の取り組みを紹介し、いくつかの県から「うちでもやってみます」という声をいただきました。


<p><b>外部への情報発信①</b></p> <p>— トライアルFA制度の活用(2005~2007) —</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>◆JFA・トライアルFA制度 ミッション7.「フットサルの普及推進」</li> <li>2005~2007「東京都におけるU-18フットサル大会」</li> <li>◆報告書の作成</li> <li>・2005年度...2001~2005の事業をまとめた活動報告書作成</li> <li>※毎回作成していた「大会報告書」が役に立った</li> <li>・2006年度...ユース(U-18)大会の運営を中心に報告書作成</li> <li>・2007年度...U-18プレリーグの試みを紹介</li> <li>◆報告書の配布とU-18大会の認知度アップ</li> <li>・高体連、CY連ほか、都内の関係機関に配布</li> <li>...まずは都内での認知度を高める</li> <li>・M7ジョイント・ミーティング(2006横浜、2007大阪)</li> <li>...U-18大会に関して、いくつかの都道府県が興味を示す</li> </ul>	<p><b>外部への情報発信②</b></p> <p>— JFA支援制度の活用(2008~2010) —</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>◆JFA・支援制度 ミッション7.「フットサルの普及推進」</li> <li>2008~2010「東京都ユース(U-18)フットサルリーグの創設」</li> <li>◆U-18リーグ創設の気運</li> <li>・「もっとやりたい!」 → 定期的な試合の場の確保</li> <li>・「もっとうまくなりたい、強くなりたい!」 → 競技力向上のためにクラブを超えた交流会、選抜チームの可能性</li> <li>・「もっと広げていきたい!」 → 他の都道府県との交流・拡大</li> <li>※自主運営できるか?</li> <li>会場は? 審判は? 責任の所在は?</li> </ul> <p style="text-align: center;">↓</p> <p>とにかくリーグ戦をやってみよう!</p> <p>“公認リーグ”の可能性と課題もみえてくるはず...</p>
---	--

都内では、年2回の大会では飽き足らず、「もっとやりたい」「もっとうまくなりたい、強くなりたい」と思うプレーヤー、チーム、クラブが徐々に生まれ、互いに練習試合をする機会が増えました。

そのようなニーズを持つクラブが集まって2007年度にプレリーグを行い、2008年度からはTFA公認リーグとして実施され、今日に至ります。





<h3 style="text-align: center;">東京都U-18フットサルリーグ</h3> <ul style="list-style-type: none"> <li>◆2007年度にプレリーグ</li> <li>◆2008年度から、TFA主催の公認リーグ</li> <li>◆2012年度の様子             <ul style="list-style-type: none"> <li>・1部・2部各6チーム、計12チーム(11クラブ)</li> <li>・10～12月に1回戦制。4～6月に交流戦・審判講習会(高校生審判)</li> <li>・主会場はフスコフットサルアレーとしまえん。筑波大附属高校体育館等</li> <li>・1部結果... 優勝: フットボウズフットサル 準優勝: 府中アスレティックFCユース 第3位: 東京成徳大学高校フットサル同好会</li> <li>・リーグ選抜... 12月に韓国遠征(大会に参加) 3月に神奈川県選抜と交流戦</li> </ul> </li> </ul> <p style="text-align: center;">「もっとやりたい」から自主運営！＝リーグの原則 <sup>7</sup></p>	<p style="text-align: center;">「はじまりの10年間(2001～2010)」と、 「次の10年間(2011～2020)」の位置づけ</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>◆「はじまりの10年(創設期)」は、“都内”で立ち上げ、育てた期間 立ち上げ、育てたのは、             <ul style="list-style-type: none"> <li>①普及目的の夏の大会</li> <li>②競技志向の冬の大会</li> <li>③フットサルリーグ</li> </ul> </li> </ul>  <ul style="list-style-type: none"> <li>◆「次の10年」は「横と縦への広がり」を志向する             <ul style="list-style-type: none"> <li>①横への広がり ... “関東”そして“全国”への拡大 隣県との交流から全国大会の開催へ</li> <li>②縦への広がり ... “底辺”から“頂点”までの拡大 多様なレベル・ニーズに応じた事業</li> </ul> </li> </ul>
--	--

リーグ戦は自主運営が基本です。東京都の場合、審判は派遣に頼るのでなく、高校生が資格を取って割り当てられた試合を担当するようにしています。ユース審判は育つし審判費を安く抑えることができるメリットはありますが、しっかりと笛が吹けないこともあり、なかなか難しいところです。

会場確保も大きな課題です。公共体育館や民間施設を借りていますが、互いのスケジュール調整が難しく、思うように試合が消化できません。学校体育館が使えたとよいのですが、既存の体育館種目が強く、フットサルで利用できる学校体育館はなかなか増えていきません。

学校運動部では夏休み前に3年生が活動を停止し、チーム編成がガラッと替わります。年度当初は新入部員が入ってくるかどうかで、リーグに参加できるかどうかも左右されます。シーズンをどこに持ってくるかも大きな課題です。

このように、はじまりの10年間(2001～2010)は、“都内”で立ち上げ、育てた期間であり、次の10年へ向けて「横と縦への広がり」を志向することを、TFA フットサル委員会主催「U-18 フットサル大会10周年記念シンポジウム」で述べました。2011年2月5日のことです。

### 3. U-18 全国大会開催へ向けて (本多)

<h4 style="text-align: center;">(プレ)全国大会開催へ向けて</h4> <p style="text-align: center;">それは本多氏の訪問から始まった</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>◆民間レベルのU-18大会             <ul style="list-style-type: none"> <li>1)「夏高フットサル」の試み 2008年8月「第1回夏の高校生フットサル大会」(フジテレビ系) 2010まで開催。2011は「震災の影響で」中止 「学校名」を出して「学校単位」で出場 「春高」より「高校生クイズ」のイメージだろうが、「フットサルの理念」から(は)かけ離れている(中塚考)</li> <li>2)「ホンダカップ」でユース(U-18)カテゴリー(は)じまる(2010)</li> <li>3)その他</li> </ul> </li> <li>◆サッカー協会公認大会 → 東京含め、いくつかの県でははじまる</li> <li>◆高体連 → フットサルには及び腰?</li> </ul> <p style="text-align: center;">↓</p> <p style="text-align: center;">2011年9月 於筑波大学附属高校体育教室 本多・中塚 作戦会議 「将来的に公式大会」となるような全国プレ大会を開けないだろうか」</p>	<h4 style="text-align: center;">サッカーキングカップ</h4> <h4 style="text-align: center;">U-18フットサルトーナメント2012</h4> <p style="text-align: center;">2012年3月24日～25日 於オーシャンアリーナ</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>■主催：株式会社フロムワン、株式会社シックス</li> <li>■後援：一般財団法人日本フットサル連盟 全国9地域フットサル連盟</li> <li>■協力：財団法人愛知県サッカー協会 愛知県フットサル連盟 名古屋オーシャンズ株式会社</li> <li>■特別協賛：サッカーキング</li> <li>■協賛：株式会社ナイキジャパン 株式会社日本ツアーサービス</li> </ul>
--	--



**サッカーキングカップ  
U-18フットサルトーナメント2012**  
2012年3月24日～25日 於オーシャンアリーナ

- 優勝 名古屋オーシャンズU-18(愛知県)
- 準優勝 作陽高校(岡山県)
- 第3位 松山工業高校(愛媛県)
- 第4位 国学院久我山高校(東京都)
- 第5位 京都橘高校(京都府)
- 第6位 VAINFC伊達U-18(北海道)
- 第7位 A.C.アズーリ(宮城県)
- 第8位 熊本県U-18フットサル選抜(熊本県)
- 第9位 日本ウェルネス高校松本校(長野県)

11

**2012年度のU-18フットサルの動向**

◆3月の「プレ大会」をめぐる動きが止まった！  
・次回も日本フットサル連盟の後援で。あせらず、あわてず、着実に  
・参加チームのおひざ元ではいくつかの動きが...

- ◆U-18フットサルの競技会が各地で増えてきた！
- 1)高校生フットサル 北澤CUP inウイターFリーグ
    - ・2012春...6月13日 於代々木フットサルコート(人工芝)
    - ・2012夏...8月26日 於テバオーシャンアリーナ
  - Fリーグ主催
  - 2)招待大会
    - ・大阪府ユース(U-18)フットサル大会(第8回) 府中アスレが優勝
    - ・クラークカップU-18フットサルフェスティバル

※U-18フットサルにとっては追い風。まずは成り行きを見守りたい  
※「グラブデザイン」を描くことが大切

12

**U-18フットサルトーナメント2013**

2013年3月30日～31日 於テバ・オーシャンアリーナ

- 主催：一般財団法人日本フットサル連盟  
産経新聞社
- 主管：公益財団法人愛知県サッカー協会  
愛知県フットサル連盟
- 後援：公益財団法人日本サッカー協会  
全国9地域フットサル連盟
- 協賛：サッカーキング、プーマジャパン株式会社

13

**「U-18フットサル」のこれから**

- いつ？  
シーズン？ → サッカー(既存の競技会)とどうすり合わせるか  
曜日？ 時間帯？ → リーグ戦を行う際に調整が必要
- どこで？  
体育館？ 人工芝？ → 学校体育館をどうやって開拓するか
- 誰が？  
サッカー部員？ フットサルに特化？  
「U-18」とは誰のこと？(高校生？第2種？18歳未満？以下？)
- 何を？＝「フットサル」にはどのような条件が必要？  
ボール？ ルール？
- どのように？  
公と私の違いは？ 担い手(組織)は？ 高体連との関係は？ 14

本日開催されたユース選抜は、2012年に創設された「U-18フットサルトーナメント」の流れを汲むものです(注：この位置づけについてJFFとNPOサロンの間の認識にずれがあるのが現状です)。当時、JFAでも、JFFでもU-18世代の大会が必要だという話があったようですが、関係者の方と情報共有するなかで、「協会・連盟の外で大会をつくって、それを公式な大会に発展させていく方が話が早そうだ」ということで、大会を立ち上げました。当時、サロンは法人格を持っていませんし、資金的にも大会を担うことはできませんでしたので、シックスとフロムワンという民間企業2社が主催となりました。JFAの主催大会ができるまでは5年かかるだろう、という話をしていましたが、2014年には全日本ユース(U-18)フットサル大会として、JFA主催のこの世代の日本一を決定する大会が誕生しました。

ユース選抜大会の「選抜」は、複数チームから選抜されたチームによる大会という意味ではなく、高校野球の選抜のように地域ごとに代表チームを選抜する、ということで、各地域のリーグ開催などの取り組み状況に応じてチームを選抜してもらおうという趣旨ですが、今後は複数チームからの選抜という方向に向かうことになるかもしれません。

過去にJFFでスポーツ振興くじ助成が受けられないことがあり、法人格を取得したサロンが代わりに助成対象となることを視野に入れて、サロンが共催となっています。現状では、JFFで滞りなく助



成を受けておられますので、サロンとしては共催ではなく後援などとして参画していくことも考えられます。

これらの2大会の成立は非常に大きな進歩でしたが、高校サッカー部勢の出場も多く、「日常的にフットサルをプレーしているチーム、選手による大会」が望む声が聞かれるようになりました。その声を受けて、今年1月に「U-18 フットサルリーグチャンピオンズカップ」としてサロン主催の大会が生まれました。現状では8都府県のみでリーグが開催されており、JFA、JFF 主導での大会開催は難しいだろうということで、サロンが主体となってスポーツ振興くじの助成を受けて開催しているものです。ただ、永続的にサロンが担っていきたいということではなく、この大会が各地域にリーグが整備されるきっかけとなり、やがては公式な大会として開催されるようになれば、と考えています。先ほどのユース選抜と同じく、開催されるべき大会、開催が望まれる大会があり、それを成立させるためにサロンが主催や共催などの役割を担っている、という考え方です。

リーグチャンピオンズカップの発信するメッセージとしては、「日本一を決めましょう」ではなく、「地域でリーグ戦をやってください」ということです。「この大会を機に各地にU-18 リーグが整備され、日常的にフットサルを楽しめる環境が整備されていくことを願う」ということです。

第1回大会は11月に助成が決定して1月に開催ということで、主管の静岡県の協会・連盟の皆様には大変な無理をお願いすることになりましたが、エコパアリーナというすばらしい環境で、心のこもった運営で応えていただきました。優勝は地元静岡のHero、準優勝は隣県の神奈川のロンドリーナで、得点王にはエンフレンテ熊本の内田くんが輝きました。熊本は2012年の大会にもリーグ選抜を派遣されるなど、早くからU-18 フットサルに取り組んでおられます。当時の監督の「熊本にできたのだから、他の県でもできると思ってもらえるはず」というコメントが思い出されます。

第2回大会は来年の1月に開催を目指して、スポーツ振興くじ助成の申請を行っています。新たなリーグ開催を期待して、12チームでの開催を目指しています。

これらの大会のほかにも、ホンダカップやグリーンアリーナ神戸での大会など、多様なチームが参加できるフェスティバル形式の大会によって同世代のチームでの競技の機会が確保されるようになっています。

#### 4. 各地の現状（情報交換）

橘：富山県U-18選抜の監督の橘です。昨年富山の高体連のサッカー専門部のフットサル担当となり、富山県のU-18大会の整備を行い、リーグ戦も開催できるようになりました。プレリーグとして3年開催していますが、会場、審判がネックになっています。東京の発足時はどうでしたか。

中塚：東京では当初から高校生が審判をやっています。審判講習会を行って、高校生に資格を取ってもらっています。高校生はファールを取れない問題はありますが、高校生がプレーして、笛を吹く、ということで定着しています。ピッチの設営などもすべて高校生がやっています。リーグ戦はやりたい人が集まって開催するわけですから、自分たちでやる、です。

大友：賀川さん、中塚先生、本多さんなどと一緒にこの世代の競技環境を良くしていこうと活動しています。武相高校フットサル部顧問の大友です。まずはチームの立場から関わっておりますが、今



年から神奈川県フットサル連盟の理事長に就任することになりました。キャプテンズ・ミッションのトライアルFAとしてリーグ戦が推奨されるなかで、神奈川はプレリーグなしで、最初からオフィシャルな大会でしたので、審判は連盟からの派遣でした。神奈川は常時100人程度の審判がいるので大きな苦労はありませんでした。現在はリーグ出身で大学生の3級審判もいるので、平日でも開催ができます。主審は連盟、その他は帯同で10年間やっています。

橘：まず審判の数が少ないので、ユース審判の育成に取り組んでいます。フットサル審判インストラクターが10名程度なので、その確保も難しいです。来年度の全日本ユースについては、帯同ありなしで参加費に差をつけるようにしたいと思っています。2016年は全日本ユース予選参加が8チームだったのが12チームに増えており、今後も増やしていきたいと思っています。プレリーグ参加は10チームでした。プレリーグには参加するが、全日本予選には出場しないチームもありました。フットサルの魅力や、フットボーラーとしての成長を促されるという点をアピールしていかなくてはならないと思います。

永松：大阪選抜の監督の永松です。梅南FCというフットサルクラブを運営していましたが、全国大会につながっているのはホンダカップと全日本ユースだけでした。全日本ユースの大阪代表にもなり、ホンダカップ全国2位にもなりましたが、中学を卒業する段階で、フットサルを続けても試合がない、という状況でした。そんななかで神戸国際大附属高校の埴田先生と関西でもリーグができないかという話になりました。本多さんとも相談して進めていくなかで、「関西」という名称は使ってはならない、ということになり、また大会に参加してくれていた作陽高校も一緒にやりたいということで、「WEST」、それにプレをつけて「U-18 フットサル WEST プレリーグ」としてスタートしました。協会の役員にもご挨拶に行きました。「君らが会場を使うと、フットサルが使ったと見られるんやから、ちゃんときれいに使えよ」とアドバイスをいただきました。2013年から2015年まで続けて、チームの出入りもあり、大阪成蹊大の1年生が参加したこともありました。プレリーグの選抜をつくって、東京や神奈川の選抜との交流戦に出場させていただいたこともありました。

そして2016年から5チームで大阪府のリーグを開催できることになりました。会場の体育館はぼくが全て抽選でとりました。全ての試合に立ち会いました。たくさんの方が期待してくれて、教えていただいて1年を乗り切りました。設営、審判などはすべて帯同でやっています。協会も「資格を与えるためではなく、実際の試合をコントロールするための講習会」をU-18、女子、社会人3部を対象に開催してくれます。ピッチの設営や試合データ入力なども含めた運営講習会を来年度の開幕に向けて実施する予定です。大阪成蹊大の柴沼先生などとも話をし、大学生が自分たちで運営している学生リーグを参考にさせていただいています。1学期に1回戦、2学期に2回戦として、受験生にも負担にならないようにと考えています。

本多：地元にいながら、大阪のリーグの進化に改めて驚かされています。永松さんと埴田さんから「全国大会をやっているんだから地元のリーグもお願いします」と言われたときに、「ホンダカップのようなカップ戦はやるけども、リーグ戦は当事者が運営するもの」という話をしました。サロンなどで中塚さんからいつも聞かせてもらっている話の受け売りですね。

橘：富山県の高校サッカーは大人が審判をしていて、顧問の先生のなかには「フットサルの審判までやるのか」という声があるので、やはり高校生に資格をとってもらわなければいけないと思います。

U-18リーグに所属している選手は基本的にフットサル連盟に登録していません。フットサルのクラブチームの数名のみが登録を行っているという状況なので、社会人主体の連盟としては、なぜ



U-18 のチーム、リーグに出費しなければならないのかという議論はあります。連盟主催のリーグになれば、選手の登録費が発生するので、それが財源になっていくと思います。

大友：全日本ユースができたことはすごくうれしいことなのですが、問題も生まれてきています。東京・神奈川はフットサル専門にやっているチームが 10 チーム以上あって、埼玉は来年からリーグを行う予定と聞いていますが、その他の県はリーグがありませんので、高体連のサッカーが主になって全日本ユースの予選が行われています。サッカーは一年中試合があるので、予選の開催時期も難しくなってきます。神奈川では全日本ユースの関東予選とサッカーの選手権の県の一次予選が同日になってしまいました。またサッカーは 1 校 2 チームというしぼりがなくなったので、出場チームが増えていく傾向もあります。神奈川はそんな状況なので、サッカー部がフットサルに取り組むのは難しいという状況です。ただ、人口も多いので、フットサル専門のチームもそれなりにあるとは言えます。今後は、高体連、フットサル連盟、クラブユースサッカー連盟のどれが主になって運営されていくのかは、都道府県によって異なっていますし、今後も違った道を進んでいくと思います。

### Ⅲ. これからの U-18 フットサルと NPO 法人サロン 2002

<NPO 法人サロン 2002 理事会 2016-5 (2017 年 3 月 10 日) 資料より転載>

「U-18 年代のフットサルは、オフィシャル大会の整備が遅れたこともあり、サロン 2002 会員が積極的に支援してきたカテゴリーです。2014 年度の NPO 法人化以降は事業の担い手として、より積極的に関与するようになりました。ここ数年で急速に整備が進んだ U-18 フットサル。“理念”を掲げて“熱き思い”で突っ走ってきましたが、これからは“現実”を見据えた上で、多くの方の理解を得ながら“継続と発展”を目指していく段階です」(3 月例会案内より)

このような問題意識を持ちながら、2 月 24 日(金) 10 時から小一時間、JFA にて(一財)日本フットサル連盟(JFF)事務局の松井氏とミーティングを持ちました。NPO 法人サロン 2002 にとっても検討すべき重要な内容が含まれますので、理事会で検討したいと思います。ご確認の上、あらかじめご意見をいただけると幸いです。

#### 1. U-18 年代のフットサル

- ◆2001 年度 東京都サッカー協会主催の U-18 競技会はじまる(年 2 回のトーナメント)  
(中略)
- ◆2011 年度(2012 年 3 月) サッカーキングカップ U-18 フットサルトーナメント 2012(名古屋)  
(株)フロムワンと(株)シックス主催。全国 9 地域から単独チームが参加して初の「全国大会」。JFF は後援。
- ◆2012 年度(2013 年 3 月) U-18 フットサルトーナメント 2013(名古屋)  
JFF と産経新聞社主催。「JFF からの持ち出しなし」という条件で JFF は主催した。  
公開シンポジウム「U-18 フットサルを語ろう」を開催
- ◆2013 年度(2014 年 3 月) U-18 フットサルトーナメント 2014(駒沢)  
JFF と産経新聞社主催で単独チーム大会。産経の費用負担と toto 助成により「JFF からの持ち出しなし」の予定であったが、スポーツ振興センターへの報告を行ったところ、一部の経費で助成対象経費として認められず、助成金は受給できたものの予定額より減額となった。
- ◆2014 年度 夏 ⇒ 単独チームの全国大会が JFA 主催となる  
夏～秋⇒ 春の大会についての議論。JFA との差別化を図るために選抜大会へ。ただし地域

によって温度差があるので「地域で選抜されたチームであれば単独でもよい」とした。JFAからは「なぜ単独チームが出られるのか。差別化が必要」との意見があったが、「個人が目標にできる大会にする」との説明で納得してもらった。2014年度事業としてJFFでは計画をしていなかった本大会であるが、JFF理事会に新設大会として提案され、実施の決定が秋になったので toto 申請には間に合わず。本大会の共催者であるサロンとの協議により「JFFからの持ち出しなし」として、協賛社を獲得し大会事業費を捻出することで計画された。

春（2015年3月） GAVIC CUP U18 フットサルトーナメント 2015（墨田）

◆2015年度 夏 JFA 主催 / 春（2016年3月） GAVIC2016（墨田）

JFFでの toto 助成申請を行ったが、採択されることが難しい可能性があり、NPO サロンでの申請を視野に入れてサロン 2002 が共催となった。株式会社シックスから 1,494,875 円の資金提供を受けて、NPO サロンが同額を負担した。

◆2016年度 夏 JFA 主催 / 春（2017年3月） GAVIC2017（墨田）

加えて2017年1月、NPO サロン主催で U-18 リーグチャンピオンズカップ 2017（エコパ）それぞれ JFF、NPO サロンにて toto 助成を受けて開催。

◆2017年度 夏 JFA 主催 / 春（2018年3月） GAVIC2018（和歌山）

2018年1月、NPO サロン主催で U-18 リーグチャンピオンズカップ 2018（名古屋？）それぞれ toto 助成申請済。

◆2018年度以降…

JFA 主催の全国大会（単独チーム）は続いていくが、「ユースフットサル選抜トーナメント」の実施については、GAVIC の 4 年契約が終了するので改めて判断が必要。

## 2. 日本フットサル連盟の考え

JFF の財源で大きいのは 1 種の登録費。ユースへの先行投資の重要性はわかっているが、それよりもいま JFF の中で優先順位が高いのは、F リーグ・地域リーグ・大学リーグといった 1 種の競技会。もともと U-18 は toto からの助成や協賛社の獲得、共催者からの支援などで「JFF からの持ち出しはない」という条件で始まっている。

12 チームの全国大会となると運営費（審判・会場・スタッフの人件費等）、旅費・交通費で 300 万、その他大会に係る経費などを積算すると計 700 万円にはなってしまう。現状、U-18 大会では旅費・交通費について大会事業費から補助が捻出できていない。大会協賛などの収入が 200 万円ほど獲得できれば、toto からの助成金とあわせて「持ち出しなく」を事業運営できる。

2017 年度は選抜大会を続けられるが、大会の位置付け、大会事業費の捻出、第 2 種のフットサル登録人口の増加策など、地域・都道府県におけるユース年代のフットサルの取り組みなど全国的に足みをそろえて考えて、時間を掛けて協議すべき事項がある。

その中で、「ユースフットサル選抜トーナメント」について、NPO サロンが主催した「U18 フットサルリーグチャンピオンズカップ (U18LCC)」との関係について、NPO サロンが現時点において両大会の主催、共催となっていることから、先に開催されている「選抜大会」の継続可否について議論され結論がでていないなかで、ユース年代の取り組みとしての理念は理解できるが、いま何を育てたいのかを考えた時に NPO サロンが U18LCC に注力するのは、先にも示したとおり地域や都道府県の整備が優先される事項になるのではないかと。

## 3. NPO 法人サロン 2002 の考え（未完）

◆要は「お金」が足りないということです。さてどうしたものか…

理事会で議論しますが、お金が降って湧いてくるわけでもない…





けど、このような事情を各地域のリーグ関係者に伝え、「それぞれの地域でお金を集めてリーグを盛り上げよう」というムーブメントにつなげていくことができればと思います…（中塚のぼやき）

- ◆サロンが共催に入ったのは、JFF で toto 助成を受けることができない可能性を受けてのものでした。サロン 2002 としての認識は「開催に向けての資金確保のために、助成金が必要であり、その要件確保のために共催となった」ことを確認していく必要があると思います。議事録にも記載されています。 [http://www.salon2002.net/src/pdf/reports/2015/rijikai2015\\_2.pdf](http://www.salon2002.net/src/pdf/reports/2015/rijikai2015_2.pdf)

今年は根回しレベルで 8 リーグを確定しましたが、今年は立候補する、あるいは立候補に向けてリーグの設立を検討する県が増えてくるはずなので、早めに「要項案」が必要で、その段階ではリーグ名を明記できずということになります。サロン 2002 として「参加リーグ募集案内」（参加リーグ決定の手順を記載）と「要項案」を作成して、各地域連盟に発信（発信先は JFF に確認できるとありがたい）でしょうか。（本多氏より 3/6 付）

## 補足資料. 富山県の U-18 フットサル

<筑波大学蹴球部同窓会茗友サッカークラブ発行

「茗友 SC 通信 2017 年 3 月号」（2017 年 4 月 2 日発行）より転載>

### 3. 高校生年代のフットサル

3 月 28～30 日、東京都墨田区総合体育館にて、日本フットサル連盟主催、NPO 法人サロン 2002 共催で「ユースフットサル選抜トーナメント 2017」が開かれました。全国 9 地域から「選抜」された 12 チームによる熱き戦いは、2 年連続で新潟県選抜と東京都選抜 A の決勝となり、これまた 2 年連続で PK 戦にもつれ込み、新潟県 U-18 選抜が優勝しました。おめでとうございます。

前年度優勝が新潟県だったため、今回、北信越からは 2 枠あり、優勝した新潟県選抜とともに富山県選抜が出場しました。そのチームを率いたのは筑波大学 32 期生の橋和徳氏です。中日に開かれた NPO 法人サロン 2002 の月例会（通算 247 回目）にも参加され、「U-18 年代のフットサルの現状と今後」について夜遅くまで意見交換しました。せっかくなので「茗友 SC 通信用に何か書いてもらえないか」と打診したところ快く引き受けてくださり、何枚かのスライドにまとめてくださいました。

#### ◆富山県 U-18 フットサルの現状とこれから

（公社）富山県サッカー協会 2 種委員会 フットサル担当

富山県高体連サッカー専門部フットサル担当／富山県フットサル連盟 強化普及部

橋 和徳（県立富山いずみ高等学校）

安村 良紀（県立南砺福野高等学校）

義浦 靖貴（県立南砺福野高等学校）

#### ◆全日本ユース（U-18）フットサル大会 富山県大会

2014 年度（第 1 回）… 3 チームによりリーグ戦形式で代表決定（2014 年 6 月開催）

2015 年度（第 2 回）… 1 チームのみの参加申し込みのため、予選なしで北信越大会に推薦

2016 年度（第 3 回）… 8 チームによるトーナメント形式で代表決定（2016 年 6 月 11 日開催）

2017 年度（第 4 回）… 予選ラウンド→12 チーム/2 グループのリーグ戦（2017 年 2 月 11、12 日開催）

決勝ラウンド→4 チームによるトーナメント形式で代表決定（2017 年 6 月 11 日開催）

#### ◆富山県 U-18 フットサルプレリーグ（非公認大会）

2014 年度 … 8 チームで開始（南砺市井波社会体育館）冬場のトレーニング充実のため。

南砺福野、砺波 A、砺波 B、砺波工業、アレスグーテ砺波、不二越工業 A、不二越工業 B



2015 年度 … 8 チームで開催（南砺市井波社会体育館）前年度踏襲。輪が広がる。

2016 年度 … 高体連事業として東西リーグとし、12 チームで開催→上位、下位トーナメントを開催  
WEST（南砺市井波八乙女体育館）

南砺福野、砺波、砺波工業、アレスグーテ砺波、福岡、高岡南、不二越工業、八尾  
EAST（日医エスポーツアカデミーアリーナ、富山中部高校体育館）

不二越工業、龍谷富山、富山中部、富山いずみ、新川、入善  
2017 年度 … 前期、中期、後期に分けて開催予定。（開催時期、会場、参加チームなど検討中）

#### ◆担当種別、担当者

富山県は2種と高体連がほぼ同じ組織。クラブユースはカターレ富山のみ

2013 年度

2014 年度 2種高体連フットサル担当 安村

2015 年度 2種高体連フットサル担当 安村

2016 年度 2種高体連フットサル担当 安村 橘

#### ◆開催における悩み

- ・フットサルのルール（競技規則、サッカーとの違い）を知らない  
→選手、保護者含めてフットサルの試合を見る機会がない
- ・高校生審判員が頼りない（ファウルを取れない）
- ・会場の確保が困難（広さ、ゴール、ライン、キック禁止 等）
- ・交通手段（車社会の土地柄、交通網が・・・）
- ・サッカーのリーグ・カップ戦日程の過密化
- ・フットサル活動への理解不足（夜間開催できない 等）

#### ◆富山の強み

- ・コンパクトな県であること（集まりやすい）
- ・U-18、23 フットサルトレセン（連盟主催）月1開催
- ・県立高校には体育館が2つある
- ・冬場のトレーニングとして取り入れたいという指導者が多い
- ・4種で経験している選手が多い

#### ◆富山の弱み

- ・3種で経験しない選手が多い
- ・フットサルへの理解が低い
- ・冬場は暖かい地域へ遠征する文化
- ・体育館の数、開放してくれる学校体育館の少なさ
- ・フットサル 指導者（フットサルC級コーチ）が少ない
- ・フットサル審判が少ない
- ・フットサル審判インストラクターが少ない

#### ◆U-18 フットサルの普及ロードマップ

参加チームの増加のためには、①ルール（審判）の普及、②運営面の普及、③フットサルの価値の



向上が必要になると考えられる。

- ①11月～1月プレリーグにてフットサル審判インストラクターによる『ユースレフェリー講座』を開設。1名以上の参加を出場条件とし、4級審判を育成。→2月の全日本ユース（U-18）県大会予選ラウンドにて帯同審判を出場条件とする。帯同できないチームは審判派遣費を参加費に上乗せ。帯同審判を「当たり前のこと」としていく。
- ②プレリーグでの運営を参加者の自主運営に任せる。フットサルに必要な運営面を「当たり前のこと」としていく。
- ③選抜大会、全日本ユース、リーグチャンピオンズカップに出場するチームを輩出し、全国を意識したチームが現れるよう、県内サッカー強豪チーム等に働きかけていく。また、フットサル部、フットサルクラブの創設を促していく。全国を目指すこと、フットサルがサッカーに良い影響を与えるということを「当たり前のこと」としていく。

以上

（文責：中塚義実）



## <2017年5月（通算249回）月例会報告>

\*\*\*\*\*

# NPO サロンの事業を考える③ 一月例会

中塚 義実（NPO 法人サロン 2002 理事長／筑波大学附属高等学校）

\*\*\*\*\*

- 【日 時】2017年5月25日（木）19：00～20：30（終了後は「景宜軒」にて懇親会 ～23：00 ごろ）  
【会 場】筑波大学附属高校 3F 会議室（〒112-0012 東京都文京区大塚 1-9-1）  
【テーマ】NPO サロンの事業を考える③一月例会  
【演 者】中塚義実（NPO 法人サロン 2002 理事長／筑波大学附属高校）  
【参加者（会員・メンバー）5名】  
川名紀義（(株)ページー）、岸卓巨（日本スポーツ振興センター）、笹原勉（日揮(株)）、嶋崎雅規（国際武道大学）、中塚義実（筑波大学附属高校）  
【2次会からの参加者】  
安藤裕一、小池靖、竹中茂雄  
【報告書作成者】中塚義実

### <目 次>

はじめに

- I. サロン 2002 発足以前
  1. 「サッカー研究会」と「社・心グループ」
  2. 三菱養和会「スポーツいんろう」
  3. 東京都高体連サッカー科学研究会
- II. サロン 2002 の誕生と月例会
  1. サロン 2002 の誕生ー「社心グループの皆さまへ」平成9（1997）年3月26日付文書
  2. 創設期の様子一年表&1997年5月6日(p.3)、9月10日(p.4)、11月3日(p.5～6)文書
- III. 月例会にみるサロン 2002 のあゆみ
  1. サロン 2002 の組織づくり①月例会改革ー1999年2月16日（p.7～10）付文書
  2. サロンの組織づくり②会員制導入ー1999年12月31日（p.11～）～2000年3月23日（～p.20）
  3. 月例会とプロジェクトーNPO サロン HP「アーカイブ」より
  4. 2002年 FIFA ワールドカップ後のサロン 2002ーNPO 法人化まで
- IV. ディスカッション
  1. 月例会の位置づけとサロン 2002 の性格
  2. サッカー以外のスポーツの話題
  3. 20周年記念シンポジウムと広報誌について

別紙資料：20 ページの文書集



## はじめに

「NPO サロンの事業を考える」シリーズ第3弾です。

1997年に「サロン2002」を名乗って以降、ほぼ毎月開かれてきた月例会。サロン2002の中核事業が来月で250回を迎えるのを機に、月例会そのものにスポットライトを当て、月例会の20年から見えてくるものを共有し、今後について意見交換したいと思います。

タイトルからは「過去志向で内向きの」話題のようにみえるかもしれませんが、そうではありません。月例会テーマの推移からは日本のサッカー界、スポーツ界の激動の近代史を知ることができ、スポーツを通しての“ゆたかなくらしづくり”についてのヒントでいっぱいです。またサロン2002そのものの推移、すなわち任意のネットワークからNPO法人化に至るまでのプロセスは、社会の変化と人々の意識の変化を考える手がかりとなり、これからの方向性を探る上で有益です。

これからの月例会について、あるいは来月に迫った「20周年記念シンポジウム」についても意見交換できればと考えます。

### 【参考】サロン2002月例会で取り上げられた「月例会」の話題（2000年度以降）

- 2013年4月 中塚義実「サロン2002のこれまでとこれからを語ろう  
ーサロン in 臼杵&公開シンポ in 名古屋 月例会200回を振り返って」  
[http://www.salon2002.net/src/pdf/monthly\\_report/2013/2013-4.pdf](http://www.salon2002.net/src/pdf/monthly_report/2013/2013-4.pdf)
- 2009年4月 中塚義実「サロン in 熊野報告&月例会を考えるー月例会150回記念企画」  
[http://www.salon2002.net/src/pdf/monthly\\_report/2009/2009-4.pdf](http://www.salon2002.net/src/pdf/monthly_report/2009/2009-4.pdf)
- 2007年2月 「サロン10周年記念パーティーーサロン2002の10年間を振り返る②」  
[http://www.salon2002.net/src/pdf/monthly\\_report/2007/2007-2.pdf](http://www.salon2002.net/src/pdf/monthly_report/2007/2007-2.pdf)
- 2006年12月 中塚義実「サロン2002の10年間を振り返る①ー10年間（10年以上）の環境の変化とサロンの変化」 [http://www.salon2002.net/src/pdf/monthly\\_report/2006/2006-12.pdf](http://www.salon2002.net/src/pdf/monthly_report/2006/2006-12.pdf)
- 2005年3月 「サロン2002のあゆみーサロン2002月例会100回記念パーティ」  
[http://www.salon2002.net/src/pdf/monthly\\_report/2005/2005-3.pdf](http://www.salon2002.net/src/pdf/monthly_report/2005/2005-3.pdf)
- 2004年2月 「いまいちど「サロン2002」のあり方を考える」  
[http://www.salon2002.net/src/pdf/monthly\\_report/2004/2004-2.pdf](http://www.salon2002.net/src/pdf/monthly_report/2004/2004-2.pdf)
- 2003年6月 月例会活性化委員会「サロン2002の月例会を活性化するには」  
[http://www.salon2002.net/src/pdf/monthly\\_report/2003/2003-6.pdf](http://www.salon2002.net/src/pdf/monthly_report/2003/2003-6.pdf)
- 2003年5月 笹原勉「GE社の「シックスシグマ」手法を用いたサロン2002の課題の検討」  
[http://www.salon2002.net/src/pdf/monthly\\_report/2003/2003-5.pdf](http://www.salon2002.net/src/pdf/monthly_report/2003/2003-5.pdf)
- 2002年3月 ワールドカップ・プロジェクト2「ワールドカップの“物語”をいかに集めるかー2002年（以降）のサロン2002を考える③」 [http://www.salon2002.net/src/pdf/monthly\\_report/2002/2002-3.pdf](http://www.salon2002.net/src/pdf/monthly_report/2002/2002-3.pdf)
- 2002年2月 「2002年（以降）のサロン2002を考える②」  
[http://www.salon2002.net/src/pdf/monthly\\_report/2002/2002-2.pdf](http://www.salon2002.net/src/pdf/monthly_report/2002/2002-2.pdf)
- 2002年1月 「2002年（以降）のサロン2002を考える」  
[http://www.salon2002.net/src/pdf/monthly\\_report/2002/2002-1.pdf](http://www.salon2002.net/src/pdf/monthly_report/2002/2002-1.pdf)
- 2000年3月 中塚義実「サロン2002：Ver.2000～2001」  
[http://www.salon2002.net/src/pdf/monthly\\_report/2000/2000-3.pdf](http://www.salon2002.net/src/pdf/monthly_report/2000/2000-3.pdf)

## I. サロン 2002 発足以前

サロン 2002 が生まれる前、あるいは誕生前後については、2006 年 12 月の月例会「サロン 2002 の 10 年を振り返る①-10 年間（10 年以上）の環境の変化とサロンの変化」がわかりやすい。

### 1. 「サッカー研究会」と「社・心グループ」

1964 年の東京オリンピックのころにできた、日本サッカー協会（JFA）科学研究委員会（1980～90 年代は戸荻晴彦委員長）は、代表チームの体力測定やゲーム分析を中心に活動していた。そのメンバーが月 2 回、都内の大学に集まって、互いの研究を紹介したり海外の文献を読んだりする勉強会「サッカー研究会」を開いていた。1984 年に大学院生となった私（中塚）はひよんなことからこの研究会の存在を知り、筑波からのこのこ出かけるようになっていく。

はじめてこの研究会に参加したとき、会場は東大駒場キャンパスのどこかだったと思うが、いま大東文化大学におられる大橋二郎氏（当時は東大助手）が「選手の移動距離と移動スピードの研究」を報告された。そのころ選手の移動距離は、画板に用紙を置いて手書きで軌跡を描く方法が主流だったが、大橋氏はタッチラインの両端にビデオカメラを設置し、一人の選手を 2 台のカメラで追い、三角法を用いて距離と速さを測定するシステムを開発し、論文にまとめられていた。当時としては画期的だっただろうし、「数学で習ったことがサッカーに生きる」ことがわかった私にとっては、サッカー研究の面白さに触れた瞬間でもあった。

この研究会はどちらかというと体力測定やゲーム分析が中心だったが、社会学や心理学に関心を持つ人たちも何名かおり、その人たちが中心となって、夏休みに開かれる小・中・高の各年代の全国大会出場チームを対象に活動実態調査を行っていた。そのグループははじめ「調査班」と言っていたが、のちに社会学と心理学の頭文字から「社・心グループ」と呼ぶようになり、こちらも不定期に勉強会が開かれるようになる。1987 年 4 月に筑波大学附属高校に着任したころ、社・心グループの会合は、筑波大附とは道路をはさんだ隣にあるお茶の水女子大学の杉山進研究室で開かれるようになっていた。

1991 年 2 月 11 日の第 11 回サッカー医科学研究会は、大きなトピックであった。JFA 科学研究委員会とスポーツ医学委員会が共同で主催するこの研究会も 10 年が経過し、今後の方向性を議論していた。プロ化の検討が進んでいたその頃は、「2002 年 FIFA ワールドカップ」の招致活動も始まり、日本サッカーが大きく動き出すときであった。「2002 年 FIFA ワールドカップ」を正面から取り上げるシンポジウムを提案した私は、裏方として企画・運営にあたることになった。代表監督の横山謙三さん、プロ化の責任者である川淵三郎さん、そして関西から大阪商業大学の上田亮三郎さんにお越しいただき、戸荻晴彦 JFA 科研委員長の進行で開かれたシンポジウムは刺激にあふれるものであった。2002 年を正面から取り上げたシンポジウムは、おそらくはじめてではないだろうか。この数日後、サッカーのプロリーグについて記者発表が為されるタイミングでもあった。このシンポジウムに「陰のフィクサー」として関わることができたのは光栄であったし、その後の動きにつながるものであった。

### 2. 三菱養和会「スポーツいんろう」

このシンポジウムの翌年から、巣鴨の三菱養和会で「スポーツいんろう」という名の勉強会がはじまった。代表監督は横山さんからハンス・オフトに代わり、横山さんは三菱養和会巣鴨スポーツセンターの長として、今度は地域に根差したスポーツクラブの経営を担うようになる。それまで代表監督をされていた方だからこそ、「文化としてのスポーツ」の重要性を強く感じられたようで、当時サッカー研究会にいたメンバーに声がかかり、第 1 回目の勉強会が開かれた。テーマは「スポーツとは何か」。その後、「チームとクラブ」「プロとアマ」「選手と指導者の資質」「スポーツとメディア」など、私が日頃から問題意識を持っていたことが取り上げられ、幅広い方々と意見交換する機会が毎月持てたこ



とは大きい。もちろん社・心グループの人にもこれに深くかかわっていた。

「スポーツいんろう」は6年間、71回開かれたところで閉会となった。養和会の方針だったと思う。1997年初めにまとめの報告書を作った。そこには、前年から始まったDUOリーグの取り組みが紹介されている。

「スポーツいんろう」と「社心グループ」は明確な会員制組織ではなかったが、口コミで仲間が広がり、研究者以外でサッカーに関わる方々が少しずつこれらの会に参加するようになった。これが1993年のJリーグ補足前後のことである。

### 3. 東京都高体連サッカー科学研究会

同じころ、東京都高体連サッカー専門部の中でも任意の研究会が始まる。言い出しっぺは喜熨斗勝史氏。いま中国リーグでストイコビッチ監督のもとでコーチをしているが、当時は都立杉並工業高校の教員で、私とは東京教員クラブのチームメートである。東京教員の活動の合間、スポーツ科学の話などで盛り上がる仲間であったが、そのうち彼が、教員を続けながら東京大学の大学院に通い始め、スポーツ科学の勉強を本格的に始めるようになる。

その彼が、高体連の中で研究会を作ろうと言い出した。当時すでにJFA科研の一員としてさまざまな活動をしていた中塚と、博士号を持つ高校教員・小澤治夫氏（当時筑波大附属駒場中高）に声がかかり、3人が発起人となって東京都高体連サッカー専門部の方々に声をかけ、1995年度より「東京都高体連サッカー科学研究会」がはじまった。私は当初は「巻き込まれた」意識でいたが、毎回テーマを決めて案内を出し、研究会の運営を担っていたのは私である。ほぼ毎月、月例会を開き、2005年度末の第99回月例会をもって閉会となった。ここがユースリーグを全都～全国展開する上で欠かせない意見交換の場となっていたが、複数の研究会を主宰しているところらも時間のやりくりがつかなくなる。最後の方はいろんな研究会と重ねながら行っていた（サロンの月例会兼高体連サッカー科学研究会といった形）。このような事情が閉会の一因ではあったが、もう一方で、東京都高体連の中に「研究部」が明確に位置付けられ、そこが研究活動を担うようになったことも、サッカー専門部内の任意の研究会が終わった要因として挙げられる。ちなみに、新設された研究部に、サッカー専門部から選出されたのは私であり（いまはサッカー専門部から4名）、その後、全国研究部の仕事に突き進んでいくことになるが、この頃はまだそんなことはまったく想定していない。

ここまでがサロンの前史の、外枠の部分である。

岸：高体連の研究会は、高校の先生が集まっていたのですか？

中塚：高校の先生や卒業生のコーチ、あとは個人的なつながりで来ていた人もいた。この研究会に顔を出した人を社心グループに呼ぶこともあった。

嶋崎：ラグビー専門部でも同じころ、似たようなことをやっていた。技術・戦術、コーチングの方法などが毎回のテーマだった。

中塚：高体連の研究会で「へーっ」と思ったのは、例えば高校生の生活調査をメンバーの学校で実施して比べてみたときのこと。部員に1週間の生活記録をつけさせて集めたのだが、うちの学校では部活後に塾へ行く者が多数おり、9時すぎに塾が終わって帰宅は10時すぎ。それから夕食。これでは強くなるわけがない。トレーニング後、理想を言うと30分以内に栄養を取りたいが、実際はこれだけ時間があいている。「うちも同じだ」というのはある底辺校の先生。「うちの生徒は部活後にバイトへ行く。帰宅は10時過ぎでそこから食事」。ああいっしょやな、もっと栄養のことをやらなあ





かなんということになり、スポーツライフマネジメントの話にがり、ユースリーグの話につながっていった。

嶋崎：小沢先生はそういうことをいろんなところに書かれている。

岸：その頃はメールはなかったのですか？

中塚：使っていなかったと思う。高体連の研究会は、うちの学校の印刷機でハガキでの案内を印刷して毎月送っていた。年度初めの総会のときに、案内をほしい人（これが会員）から 1,000 円ずつ集め、ハガキ代とした。毎回 100 通ぐらい送っていたと思う。「スポーツいんろう」は三菱養和会から郵便物が毎回届いた。

嶋崎：いまから思うと、高体連のラグビー研究会は、トレーニング方法や技術・戦術の話ばかりやっていたから発展性がなかった。社会的なことを考えていなかったのはサッカーとの大きな違い。それと、ラグビーの場合は高校選抜を頂点とする強化の仕組みができて、勉強会でともに学んでいた人にコーチの要請が入ってどんどんそちらへ人を持っていかれてしまった。もっと上のところで組織的な研究が始まり、高体連の研究会はなくなっていった。もっと底辺のところを見据えてやっていくべきだった。高校生の生活調査をやったこともないしリーグ戦の話にもならない。毎回技術・戦術・トレーニングの話に終始した。

中塚：サッカー科学研究会も、初期のころは同じ。やはり現場の指導者の興味は、日常のトレーニングの話に向かう傾向がある。実技研修も結構やった。その中で栄養の話を含めたスポーツライフマネジメントの話になり、リーグ戦の話につながっていった。1990 年代終わりごろは、サロン 2002 とも連動して、ユースサッカーリーグをどのように展開していくかが大きなテーマとなった。それぞれの研究会を別個にやっていくのは時間的にも難しいので、高体連の研究会とサロンの月例会を兼ねて開催し、高校の先生方が、学校以外の方と接する機会を設ける機会を意図的に作っていた。

## II. サロン 2002 の誕生と月例会

ここからは別紙資料と年表をご参照いただきたい。

### 1. サロン 2002 の誕生－「社心グループの皆さまへ」平成 9（1997）年 3 月 26 日付文書

当時のメンバーにメールで送った文書がある (p.1~2)。この投げかけを踏まえて、1997 年度より「サロン 2002 の月例会」が開かれ、新たな歴史が始まる。

「1. 社心グループのはじまりについて－実働部隊としての機能」には、社心グループが研究活動の実働部隊として機能していたことが書かれている。確かにそうで、1997 年度も日体協のもとで JFA 科研の事業として進めていた「サッカータレントの発掘方法に関する研究（全国の指導者にインタビュー）」や、「地域における一貫指導システムの構築に関する研究（磐田市のフィールドワーク）」など、JFA から予算をもらってやっていた。今後も実働部隊としての社心グループの機能は残っていくだろうと述べている。

一方で、「2. 月例会について」には、参加者のレベルアップを目指して月 1 回の勉強会をするようになったが「定例でやっているうちに話題は多様化し、それにともない仲間が仲間を呼び、気がつけば職種を越えた多種多様な方が大勢集まる非常に珍しい、楽しい会に発展していました」とある。こ



のあたりが、社心グループの勉強会から次の段階に向かう動機となった。

「3. 平成9年度へ向けて」と題して、「実働部隊としての機能と、月1回の情報交換会を共存させながら、両者の質を高めていくことがこれからの課題です」として、次の提案をしている。

- 1) 情報交換会は従来通り続ける
- 2) 情報交換会の名称を、社心グループとは別に、何か気の利いた名称に変更したい
- 3) 日程と場所を固定したい…この段階では毎月第3金曜日、お茶大の杉山研究室
- 4) 実働部隊としての「社心」グループは存続する…プロジェクト（この段階では研究プロジェクトを指す）ごとに人集めをして取り組む

## 2. 創設期の様子一年表&1997年5月6日(p.3)、9月10日(p.4)、11月3日(p.5~6)文書

このような投げかけに対してメールや電話で意見交換し、「サロン2002」という名になった。5月6日の文書には、次の一節がある。

昨年度、「社心グループの定例会」として行っていたものを、本年度は発展的に解消し、新たに「サロン2002」という名称で、毎月第3金曜日の夜、6時半~9時まで、お茶の水女子大学で行いたいと思います。旧社心グループへの参加者の方はどうぞ気軽にサロンへ遊びに来てください。

当面、2002年までの期間限定的活動ということになりますが、ここでいう「2002」は、その後のあり方も含めたものとしてとらえていただきたいと思います。基本的には情報交換会ですが、このサロンで得た情報やアイデアは、それぞれの現場で大いに活用していただくことと、できれば何らかのメディアに載せて広く伝えていきたいと思います。

年表にある第1回月例会は4月18日。このとき3本の話題があった。当時大学院生だった高橋義雄氏の「日本サッカーにおけるナショナル・アイデンティティの確立に関する研究」も、中塚が紹介した「韓国社会と2002年ワールドカップ」も、いずれも3月にあったスポーツ社会学会の報告である。「スポンサーの立場からみた巨大スポーツイベント」を発表した榎竜一氏は、筑波大学の体育研究科を修了し、同研究科の研究生であったが、ご自身の修士論文を報告してくれたと記憶している。

このように、研究者の集まりという性格は維持しつつ、テーマには時事ネタも含まれる。5月16日の第2回月例会のメインテーマは「サッカーくじ」。高橋義雄氏と三堀潔貴氏が話題提供した。高体連サッカー科学研究会からサロン2002に来るようになった三堀氏は地理の教師であり、「サッカー地理学」を授業で実践されている方である。

第3回（6月20日）は、仲澤眞氏が海外の視察報告も含めた「観戦文化に関する調査報告」をする予定だったが、台風により中止。「来てしまった人はそのままカリンカへ」ということが年表に記され、1回にカウントされている。

第4回（7月18日）はお茶大で仲澤さんの報告。そして夏休みに突入する。

この年にJヴィレッジができ、白馬や河口湖で行われていたU-15とU-18のクラブユースの大会はJヴィレッジに移った。そのU-15大会初日の夜、サロンの月例会が「合宿」として行われた。社心グループ時代に伊豆の今井浜で「合宿」と称して海水浴と懇親会を楽しんだことはあったが、これがサロン2002としての初合宿である。最後の方は缶ビールを飲みながらであった。4ページの資料をみると、「10名（+2家族）の参加者」とある。井上俊也さんのご家族も参加されていた。

この頃は1998W杯予選のまっただ中。サロンの月例会は第3金曜日に行うことにしていたが、9月の第3金曜日はUAE戦当日だったので開催日を変更し、会場も筑波大附属高とした。テーマは「2002年ワールドカップの練習会場について」。Jヴィレッジの合宿で井上俊也さんがフランス大会のキャンプ地の話をされたのだが、2002年の開催が決まっている日本では、キャンプ地の話題はほとんど出て



いなかった。そこにいち早く目をつけたのがわれわれサロンである。高知県サッカー協会副会長で、テレビ畑ご出身の宮村剛さんにお越しいただき、高知県の姿勢を伺い、キャンプ地に立候補するにはどうすればよいかについての「作戦会議」となった。しかし最終的には、高知県が FIFA ワールドカップのキャンプ地に立候補することはなかった。「2002 年は高知国体があるから」である。当時、成田十次郎先生が高知県サッカー協会長をされていたのだが、県の意識はそこまで向かなかったのである。結果的に、中四国は開催地に選ばれることもなく、日本列島の中でこの縦軸がまっさらになってしまった。惜しい。

第7回(10月17日)は「サッカーを取り巻く職業について—プロ選手のセカンドキャリア問題を考える」と題して、できたばかりのJリーグ選手協会の広報誌を編集されていた大場淑子さんに報告していただいた。

そして第8回(11月21日)に、はじめて「ユース(以下の)年代のサッカーを考える」を取り上げた。話題提供者は中塚で、これ以降何度かこのテーマを取り上げられている。ちょうどこの頃、私はJFAの第2種検討委員であり、JFAニュースに「ユース年代のサッカーはいま」と題する連載をしていた。月例会では、Jリーグ発足以降のユース年代に関する調査報告や、1996年度に始まったDUOリーグのこと、それを全都展開、全国展開しようとしていることなどを紹介し、ざっくばらんに意見交換した。高体連サッカー科学研究会と兼ねて開催していたのはこの頃のことであり、学校の先生に、学校外の人たちの接する機会を設けようとしたのは前述のとおりである。

5ページの1998年11月3日付メールには、「問題提起—“サロンの法人化”へ向けて」が出てきている。いまは廃刊となっている『学校体育』という月刊誌にサロン2002の紹介記事を掲載し、早くも「NPOとしてのサロンの法人化を検討中です」と述べた。サロンのネットワークはどんどん巨大化し、運営が大変になってきたことや、サロンの可能性をもっとアピールしたいということから出てきたものである。法律ができたばかりのNPOを視野に入れていた。1999年1月29日には、当時一橋大学の院生だった松下徹氏が「NPO法について」、中塚が「サロン2002のこれまでとこれから」について語っている。

6ページ。1998年11月4日付で「緊急サロンのご案内」がある。横浜フリーゲルズがなくなるといふときに、「サロンで何かできないか」ということで、その2日後に集まったものである。

岸：この頃って毎回何人ぐらい来ていたのですか？

中塚：20人ぐらい来ていたと思う。

岸：けっこう顔の知れた人が来ていたのですか？

中塚：そういう人もいるけど、いろんな人が来ていた。お茶大からうち(筑波大附)へ会場が移った背景も一つはそこにある。初年度の9月18日から、会場は筑波大附になった。女子大に得体のしれない人たちが20人もやってくるのは、杉山先生からするとやりにくくなってきたようだ。いまから思うと通産省のお役人だった平田竹男さんや、先日亡くなられた広瀬一郎さんも常連だった。

岸：濃いメンバーが集まっていた。

中塚：そう。こういう話をする場がここしかなかった時代。だからいろんな人が集まってきた。



### Ⅲ. 月例会にみるサロン 2002 のあゆみ

#### 1. サロン 2002 の組織づくり①月例会改革—1999年2月16日 (p.7~10) 付文書

前述のとおり、1999年1月29日の月例会のテーマは「NPO法について」。一橋大研究生だった松下さんが、できたばかりの法律の解説をするという挑戦だった。参加者にはNPO法でクラブづくりをしようとする現場の当事者がごろごろいる中で、松下さんは相当苦戦されていた（いまもトラウマ?）。

私からは「サロン2002のこれまでとこれから」について語った。このときの意見交換を踏まえてつくったのが、「サロン2002のこれから（案）」と題する7~10ページの文書。そこには「法人化について」「会員制について」「月例会について」が記されている。

##### 1. サロンの法人化について

時期尚早であるが今後も検討を続ける

##### 2. 会員制について

- 1) 1999年度より会員制をとるべく準備を進める…会員資格、年会費など
- 2) 1999年7月までに「サロン2002名簿」を作成する
- 3) サロンのメーリングリストを開設し、会員が情報を共有できるようにする

##### 3. 月例会について

- 1) 月例会はこれまで通り、誰でも参加できる自由な情報交換の場とする
- 2) 2月より月例会参加費を徴収する。参加費は1,000円
- 3) 参加費の使い道…謝金、実費、事務局経費など
- 4) 月例会の様子はテープに保存する

ここでの提案は、その後、ほぼ実現していく。

このころ情報はEメールで配信していたが、受信できない環境の人もいて、その人はFAXを受信先としていた。その場合、1枚につき40円ほどかかっており、それを私が自己負担していたのだが、「それはよくない」ということが参加費徴収の根拠の一つとなった。会員制導入の際には「Eメールで情報を受信できることを会員資格に入れてはどうか」との議論もあったが、当時134名中48名はFAX受信で、これを会員資格とすることはメンバーの切り捨てにつながると判断し、この段階では「努力目標」に留めることとした。

#### 2. サロンの組織づくり②会員制導入

—1999年12月31日 (p.11~) ~2000年3月23日 (~p.20)

1999年度は、「草サッカーはいま」で浜村真也氏が登壇したり、番外編でスコットランドの社会学者、ムアハウス氏をお迎えし、JFAと日本スポーツ振興センターで情報交換会を開いた。新潟、掛川への「出張サロン」もあった。7月のスポーツ産業学会では、ネット型の新しい「マルチスポーツクラブ」（「総合型地域スポーツクラブ」をこのように表現することもあった）の事例としてサロン2002が紹介された。2002年を前にして、サロン2002の活動は勢いに乗っていた。

ノストラダムスが人類滅亡を予言していた1999年7月を無事乗り越え、2000年代に突入するまさにその直前（12月31日）に会員に送ったのが11ページの文書である。当時の様子がこの文書からうかがえる。

「サロンのメジャー化」ということを数年前から言っていましたが、時代がサロンをメジャーな舞台に押し上げていく様子が、今年1年を振り返るだけでもよくわかります。この組織をどうやっていくのかは、そのまま日



本のスポーツ界の方向性の指針ともなるでしょう。以下の4点を軸に、皆さんもサロンの当事者として、ソーゾー（想像・創造）力を駆使してイメージをふくらませておいてください。

1. 続けるために…事務局機能の強化と財源の確保
2. 広げるために…広報＝インターネットと出版活動／“出張サロン”と全国各地の“サロン2002”

広がりに対するリスクマネジメント

3. 深めるために…メーリングリストの活用／サブグループの必要性／汗をかく事業
4. 活かすために…現場へのフィードバック／政策決定への関わり

今年1年かけて、サロンの今後をさまざまな角度から検討していきたいと思います。より良い組織にしたいと思いますのでご協力のほどよろしくお願い申し上げます。2月の例会で時間をとって検討する予定です（以下略）

このような問題意識を持って検討を開始した。メールのやりとりだけでなく、「将来検討会」の名で意見交換会（兼飲み会）を何度か開き、その経過を共有しながら組織化の準備を進めていった。その資料が13～17ページにある。

2月5日に日暮里駅前の居酒屋で、加納さん、川井さん、笹原さんらが集まったのが13ページの第1回検討会。第2回検討会は2月18日、筑波大附の体育教官室で、内田さん、鶴木さん（横浜フリューゲルス問題に尽力）、鈴木崇正さん、両角さんが参加。メール参加の井上さんの意見は興味深い。

（前略）まず、私自身「サロン」は前身の社心グループ時代の1996年3月にお茶の水女子大でスピーチを行ったことが最初のコンタクトでした。（略）サロンの存在は私にとって「刺激」となり「自信」となるものでした。

（略）私にとってサロンは「若手の活動する研究者がさまざまな分野の英知を集めて日本サッカーの発展に寄与していく」ということで私の持っている「ささやかな英知」も役に立って「貢献している」という満足感と、サロンのあとで繰り広げられる「サッカー談義」を楽しむという二つの喜びがあったわけです。

ところが、サロンから私が足を遠ざけることになる二つの参加者の変質が起きました。まず、サロンという媒体を「貢献するもの」と考えるのではなく、これを「利用する、営利活動に使う」という存在が現れたことです。「普通の研究者」や「普通の先生」や「普通のサラリーマン」が「日本サッカーに貢献したい」と考えて集まっているのに、逆にこの場を利用するものが出てきたのです。以前私は、サッカーは「宗教であり戦争である」と言いましたが、これは教会でみんながお祈りしているところや戦場で戦っている場で「弁当を売っている」ようなものです。

それからもう一つは、サッカー談義が中心になり、「お祈り」や「戦い」の部分がおろそかになり、「お祈りや戦争のあとのお食事会」に重点が置かれるようになってきたことです。「サッカーが好き」というだけの人たちとサッカー談義だけをすれば別にサロンでなくてもいいわけです。

この二つの参加者の変質が、私がサロンに足を運ばなくなった理由です。同じようなことを感じている人も他にいると思います（略）。おそらく私と同じような理由でサロンを去った人も多く、私がサロンに初めてうかがった際の方はほとんど残っていないと思います。そんな中で毎月会合をマネジメントされている中塚さんのご苦勞をサポートしてあげたい、ということで簡単ですが自分の考えをまとめました（以下略）。

このころ、井上さんの「第一次遠のき」があったようだ。「第二次遠のき」はNPO法人化の際にあったが、先月（2017年4月）久々に月例会に登壇され、メンバーに復帰されたのはご存じのとおり。

3月16日の第3回討論会（16ページ）では宇都宮さん、香西さん、島原さんが集まり意見交換。

そしてそれらを踏まえ、2000年3月27日の月例会で、「サロン2002 Ver2000～2001」と題して中塚が今後の方向性について話をした。事前にメンバーに送った資料が18～20ページのものである。

NPOサロンのHPの「ヒストリーアーカイブ」には、このときにつくった設立宣言と規約が掲載されている。1997年から「サロン2002」を名乗っているので、設立宣言は「改めてこれを定めた」とし



た。ゆるやかな、しかし組織として最低限の要素を整えた規約は両角さんが原案を起草し、若干の修正を経て 2000 年 4 月 1 日付で確定した。月例会をはじめとする「活動」を説明する文書もつくった。

これらがアーカイブとして HP に載っているのでもておきたい。

### 3. 月例会とプロジェクト—NPO サロン HP「アーカイブ」より

HP のアーカイブに掲載されている「月例会」の文書は、いまでも生きているものである。今日のメインテーマは「月例会」なのでこのあたりが一つのポイントとなる。

月例会のテーマは会員が出し合う。メンバー外から演者を呼んできて活動を続ける組織もあるが、サロン 2002 の月例会は、会員の持ち回りが原則である。

「発言はできるだけ簡潔にお願いします」とわざわざ書いているのは、月例会を自己 PR の場にしようとする人が、このころ少しずつ出てきたことに起因する。そのような人の発言は、自分のことばかり。だからこのような一文を入れている。

報告書のことも書かれている。この頃は全部私が作っていた。2 時間のテープ起こしが 2 時間以上かかるのは当たり前だが、実際はいろんな仕事と並行しながら報告書を作っている。トータルするとどれくらい時間をかけているのだろうと考えたとき、実質作業時間（机に向かっている時間）は 5 時間ぐらいだと考え、時給 1,000 円で計算して 5,000 円とした。いまは報告書作成者を毎回募集し、仕上がった段階で 5,000 円を支払っている。この価格で約 20 年間、ずっとやって来ている。

やってみればわかるが、話し言葉を書き言葉にして小見出しをつけ、資料を添え、レイアウトをしてみるとやっていると 5 時間では終わらない。この価格で続けてきたのは奇跡に等しい。

笹原：今年度予算では 10,000 円にしている。

このときに「プロジェクト」も定義した。月例会は「情報交換の場」で「人との出会いの場」だが、何らかのアウトプットを出したいときは、希望者で集まってやってくれ、というもの。サロンの最初のプロジェクトは「フットサル・プロジェクト」。次に「ワールドカップ・プロジェクト」ができ、2002 年に向けて何ができるか、あるいは 2002 年の物語をどう集めるかについて議論し、公開シンポジウムや、HP に物語を集めることが企画・実践された。

NPO 法人となっただけでも、基本的にはこの姿勢は保持されている。よりプロジェクトに取り組みやすいようになったと言えるだろう。

### 4. 2002 年 FIFA ワールドカップ後のサロン 2002—NPO 法人化まで

年表を追いながら、その後の動きをみていきたい。

まだ 2000 年ぐらいだけど、このあたりでサロンの姿が整ってきた。

2001 年、2002 年。ワールドカップめぐる話題が多いのは当然だが、同時にユースリーグの話題も何度かある。ちょうどこのころ、私自身は DUO リーグのムーブメントを全都、さらには全国へ展開することに本腰を入れて取り組んでいたことが、月例会テーマに反映されたようだ。こちらとしては当事者として抱える課題を皆にもんでもらいたいと考えていたのだが、月例会テーマがユースリーグに偏ることに違和感を覚え、離れていく人がいたのも確かである。

2003 年 5 月には、笹原氏による「GE 社のシックスシグマ手法を用いたサロン 2002 の課題の検討」があった。「月例会を活性化するには」というテーマもある。FIFA ワールドカップ後に、サロン 2002 のような組織が各地にでき、サロン 2002 のあり方を、時代に即して見直していく必要性が生じていた。

2004 年度末には月例会 100 回記念パーティが開かれている。

2005 年の公開シンポジウムではクラマーさんをお招きした。



そして 2006 年にはついに海外で出張サロンを開催した。フランクフルト中央駅に集合してパブリックビューイングを経てアップルワインの店へ行った（もう 1 回はスポーツクラブ訪問）が、私は集合に 1 時間も遅れてしまった。ごめんなさい。

この頃、少しずつためていたお金がある程度まとまり余力が生まれ、サロンの業務で出かける場合の出張費を出せるようになっていた。しかし 2007 年度末から 2008 年度にかけて「出張サロン」をやりすぎて、またお金のない時代に戻っていく。

2009 年度末の公開シンポジウムではじめてラグビーを取り上げ、その後も何度かサッカー以外のスポーツの話題が出てくるようになる。U-18 フットサルの話や、歴史ネタもたびたび取り上げられた。

並行して、サロン 2002 の今後のあり方についての議論は総会や理事会で進めていた。2013 年度には法人化プロジェクトが設置され、プロジェクトからの問題提起が月例会で何度か為された。それを受けて理事会で原案を作成、議論を続け、最終的には 2014 年 5 月 31 日の総会で NPO サロンが設立された。

ブラジル大会の日本の緒戦の前夜、2014 年 6 月 14 日に、NPO サロンの 1 回目の月例会がフットボールサロン 4-4-2 で開かれた。テーマは「理事長が語る FIFA ワールドカップ」である。

昨年度末からは「NPO サロンの事業を考える」シリーズを 3 回開き、本日が第 249 回となる。

ということで、ざっくりとはありますが、サロン 2002 のあゆみと当時の時代背景を、月例会を通して振り返ってみました。

## IV. ディスカッション

### 1. 月例会の位置づけとサロン 2002 の性格

川名：サッカー協会との結びつきはけっこうあったんですか？

中塚：いまは直接的なものはないですね。けど昨年の公開シンポジウムでは後援をいただきました。

この 20 年ではっきりしているのは、日本サッカー協会自体がちゃんとしてきたということです。J リーグが始まる前は少人数のボランティアでやっていた協会が、いまでは 200 億ぐらいの大きな組織になっている。小さな組織で Face to Face でやっていたころの JFA 科研がルーツにあるので、他の似たような組織よりも JFA には近いと思います。

岸：月例会の演者はいまも持ち回りという発想ですか？

中塚：そうです。もちろん会員外の演者を排除するわけではないけど、演者が会員外の場合は会員がコーディネーターとなって、その人の責任で呼んでくる形をとっています。月例会で話をしてくれるような人は、サロンの“志”に賛同するはずだというのもあります。

笹原：逆にそういう人を呼ぶ、ということですね。

中塚：そうです。月例会でしゃべってもらった時点では会員ではなかったけど、月例会後に会員になるケースもけっこうありました。近いところ言うと、第 239 回の「ある女子サッカー選手の異文化体験」の野口亜弥さんは岸君の紹介で話をしてもらったけど、この時点では会員ではありませんでした。けどすぐに NPO 会員になってくれました。

岸：いまあまり月例会に出てきてない方でも、名簿に載っている方にはぜひ今後発表してもらいたい





ですね。

中塚：それが会員からすると、この会に対する GIVE の一つになると思います。たぶん皆さんおもしろいことをやっておられると思うし。

笹原：1 回も月例会に参加したことがない人もいますね。

岸：昔は参加してたけど、という人も大勢いると思います。

中塚：井上俊也さんもそうだし、長岡茂さん、香西武彦さんも復活しています。あの頃の人たちが徐々に戻りつつあるのもおもしろいですね。できれば今度のシンポジウムで、そういう人たちが集まるような仕掛けができるとなおおもしろい。

嶋崎：シンポジウムでは、社心グループを知っている人たち、この年代の人たち、NPO 法人化したいまのサロンとか、年代ごとに登壇していくのもおもしろい。

中塚：この 20 年間について、今日は主に月例会ネタで振り返ったけど、いろんな変化があります。サッカー協会がちゃんとした組織になっていったのもそうだし、通信手段一つとっても、ハガキを送っていたころから、メールを FAX で受信する人たちがいた問題、メールで送受信できることを入会の条件にしてよいかどうかという議論もあった。そういうのを経ていまに至る。このように、いろんな切り口でこの 20 年を見わたすことができる。

笹原：過去のメンバーだった人全員にシンポジウムの通知を出すという考えもある。ただし、サロンの方向性とは合わず退会した会員もいる。

中塚：法人化の段階で、議論のあとのお食事会がメインだった一部の人たちが離れていった。それもいいけど、20 年の経緯、特に初期のころからの流れを考えると、彼らが提唱した「ゆかいな仲間たち」というだけではもったいないんですわ。

川名：基本となる考え方は 2000 年 3 月の「サロン 2002 の“志”」ですね。

中塚：そうですね。サッカーから始まっているけど、いまでは「スポーツを通しての“ゆたかなくらしづくり”」としています。

## 2. サッカー以外のスポーツの話

嶋崎：どこからほかのスポーツの話題が出てきたのかをみていたんですけど…

中塚：最初はラグビーの話じゃないですかね。

嶋崎：2009 年度末に岩淵 GM を呼んで公開シンポジウムをやった。

岸：川崎競馬もありました。



中塚：2009年7月ですね。茅野さんが神奈川県で深くかかわっておられた。

笹原：サッカーが好きで、ここに集まってくる人が少なくなってきたような気がします。サッカーだけだと話題が少なくなってきたのではないかな。昔はもっといろんな話題が出ていたような…

嶋崎：それは逆じゃないですかね。サッカーを語れる場が増えたということではないでしょうか。いろんなところに分散していった。サッカーを好きな人は増えていると思います。

岸：発信できる場が増えたのもあるでしょう。ブログとか。

中塚：勝手につぶやけるわけやからね。だからわざわざ月例会で自己PRしなくてもいい。

岸：ならば顔をあわせられるとか、そういうところにメリットを作っていないと。

嶋崎：2007年8月の「特待生問題を考える」はサッカーだけではないですね。

中塚：スポーツ法学会でシンポジウムをやったんです。白井久明さんがコーディネーターの一人で、それが白井さんにつながったきっかけですが、演者の一人として私が登壇しました。

嶋崎：僕が参加した中で参加者数が一番多かったのは坂田さんのとき。2008年1月23日。隣の音楽室でやりました。

中塚：会議室は入試関係でロックされていたので音楽室でやりました。その部屋がいっぱいになるぐらいでした。「特待生問題を考える」は、進行中塚、参加者、本日の流れ…。8月4日にシンポジウムがあって、そこで深められなかった話を自由にしませうという月例会のようですね。

笹原：ずいぶん前からほかのスポーツもやっていたと思ったけど、2009年からなんですね。

中塚：坂田さんの会は2008年1月。31人来ている。この話もおもしろかったよね。

嶋崎：僕は特に内部の人間—帝京の話。裏側も知っているから。

中塚：改めて見てみると、サロンのHPに載っている月例会報告はものすごい資料やと思う。けどどれぐらいの人が見ているのか。

笹原：ほんとに知りたいですね。

### 3. 20周年記念シンポジウムと広報誌について

中塚：もうちょっとだけ、今年度の「20周年記念シンポジウム」について時間を区切って話をし、中華屋へ移動して続きをやりましょう。

第1部、第2部と2部構成にするのは一つの手。それも、嶋崎さんが言ったみたいに時期で分けるやり方はある。



岸：サロンの会員で、会員以外の人に対してもよく知られている有名人に話をしてもらうのはどうでしょうか。宇都宮さんがその代表かもしれないけど。そうすると、この会にはこういう人もいるんだという PR にもなります。同窓会的な雰囲気を残しつつ、内輪で終わらないためにも。

笹原：宇都宮さんはしばらく来てませんね。この日は Jリーグがあったんだっけ？ 試合があると、宇都宮さんは取材があるかも。

中塚：サロンのトップページの写真は宇都宮さんが提供してくれています。新しくなっていますね。定期的に入れ替えています。  
ちなみに、川名さんがつくってくれた会員募集チラシがこれ（スライドで提示）。

川名：A4 の募集案内を 2 種類つくってみました。細かい情報を裏面にまとめてみました。

岸：このチラシにスポンサーをつけるというのはどうなのか。値段に応じたサイズで。

笹原：チラシを広告媒体にという考え方もあります。

中塚：2004 年度の公開シンポジウム報告書「toto を生かそう」は、途中から「サロン 2002 のあゆみ」が書かれている。今回作る報告書、ではなく広報誌には、こういうページが必要なのもかもしれない。

笹原：何を広報誌に入れるかから話し合いたいですね。

中塚：案内チラシの話、広報誌の話…

川名：案内チラシは何部位つくるものなのですか

笹原：あればいろんなところに使える。

岸：我々が持っている、あったときに渡せる。

嶋崎：SFT の全体会では置かせてもらった。

笹原：会員やメンバーになったときの、わかりやすいメリットは？

岸：ML ぐらいしかないのが現状です。

笹原：あとは名簿か。

中塚：バッジがもらえるとか…。目に見える形として。

嶋崎：大して意味はないけど、一つのロイヤルティにはなる。それにお金をかける意味があるかという話にはなるけど。

岸：会員募集に賛助団体も入れればよい。

14

中塚：ここではこれぐらいにして場所を変えましょか…。と思ったけどまだ教生がおるんや…  
(しばらく雑談の後、「景宜軒」に移動)

文責：中塚義実



# サロン2002とは

「サッカー・スポーツを通しての“ゆたかな暮らしづくり”」を“志”に掲げ、スポーツ文化研究会サロン2002が任意団体として活動を開始したのは1997年度のことでした。それ以来、主に東京都内で月例会を中心に活動を展開しています。すでに250回を超える月例会のテーマは、ユースサッカーリーグやU-18フットサル大会の創設、FIFAワールドカップへの市民参画、サッカーの歴史や海外のスポーツ環境の調査・研究、スポーツとアートの融合、ラグビーの普及などさまざまです。また、年1回開催される公開シンポジウムは、より多くの方々と交流する機会です。時には月例会やシンポジウムを東京以外の地域で開き、全国各地の方々とネットワークを築き上げてきました。

私たちは、文化としてのスポーツには、さまざまな社会問題を解決する潜在的な力があると信じています。また、社会問題と接することによってスポーツの持つ可能性が広がり、文化としてのスポーツが人々の暮らしの中に根付くようになってほしいと願っています。



Photo by Tetsuichi tete UTSUNOMIYA

## 主な活動・事業内容

### 月例会

サッカー・スポーツ文化の研究をテーマに毎月開催

### 公開シンポジウム

年1回開催。全国のネットワークで多くの方々と交流する機会

### イベント主催・共催

U-18フットサルリーグ  
チャンピオンズカップの運営など

## 会員種別

### 1 NPO法人サロン2002 会員

〈年会費10,000円〉NPO法人の総会議決権を持って運営に参画し、同時にスポネットサロン2002のメンバーにもなる。

### 2 スポーツ文化ネットワーク・サロン2002 メンバー

〈年会費3,000円〉NPO法人サロン2002が運営するネットワークのメンバーとして、様々な情報に接し、また発信する機会を持つ。

### 3 NPO法人サロン2002 賛助団体

〈年会費30,000円〉NPO法人サロン2002の目的に賛同し、活動を賛助する。広報誌に広告掲載の機会を持つ。

ご入会は下記申込書にご記入のうえ、年会費と共に会員に渡していただくか、ウェブサイト (<http://salon2002.net>) においても可能です。また、サロン2002の目的にご賛同いただける企業様の賛助へのご参加もお待ちしております。



サロン2002は  
スポーツ・フォー・トゥモロー・  
コンソーシアムに加盟しています

特定非営利活動法人サロン2002

〒130-0022

東京都墨田区江東橋3-5-2 サーストンビル1階

<http://salon2002.net>



◀ キ リ ト リ ▶

## サロン2002入会申込書

フリガナ

氏名・団体名:

住 所: 〒

電話番号:

メールアドレス:

入会の動機やコメント:

会員種別 (どちらかを選択してください)

NPO法人サロン2002会員  
〈年会費10,000円〉

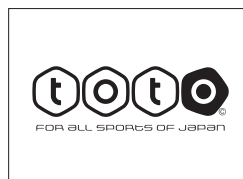
スポーツ文化ネットワーク・サロン2002メンバー  
〈年会費3,000円〉

NPO法人サロン2002 賛助団体  
〈年会費30,000円〉

誰もが世界一になれるわけでもない  
誰もが日本代表になれるわけでもない  
それでも人はスポーツをする  
昨日の自分に追い越されないために  
明日の自分を追い越すために  
スポーツに鍛えられた人生は  
勝っても負けても きっと負けない

スポーツは、自分を超越するためにある。

# スポーツくじ



スポーツくじ (toto・BIG) の収益は、日本のスポーツを  
育てるために使われています。



NPO 法人サロン2002 広報誌 (創刊号)

## 遊 - A S O B I -

発行年月日 2018年3月31日

発行元 サロン2002 理事長 中塚義実

<http://www.salon2002.net/>

印刷所 株式会社甲文堂

\*本報告書の内容は、それぞれの執筆者・演者・撮影者に著作権が帰属します。内容の一部または全部を転載する場合は、それぞれの執筆者・演者・撮影者にあらかじめご相談ください。